high school D×D ～仮面ライダードラグナー～

ドラゴンズネスト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神という名の上位者によって送り込まれた転生者達によって狂わされた世界に舞い降りる転生者を狩る龍の騎士。

仮面ライダー龍騎の世界の仮面ライダーの力を持って転生者を狩る少年と少女達の物語。

この作品はｐｉｘｉｖ及び自サイトにも連載しております。

目次

ep.001 1
ep.002 19
ep.003 31
ep.004 41
ep.005 49
ep.006 61
ep.007 72
ep.008 80
ep.009 87
ep.010 95

ep. 001

「何、この状況？」

とある理由から彼、『天宮　四季』が足を運んだ廃墟……そこには、

「ぐがぁぁぁぁぁぁ!!!」

人の上半身に蜘蛛の下半身を持った怪物が居た。……四季の知っている者とは違って生々しい……と言うか生物と言う外見を持った怪物が咆哮を上げていた。

まあ、其処までなら四季としてもさっさと倒してしまうという選択肢を取る所だろう。だが、怪物の目の前には腰を抜かしている一人の少女。

―キイイイイン！―

その状況に戸惑いを覚えていると四季の耳に耳鳴りの様な音が響いてくる。ふと、鏡を覗き込むと東洋の伝説に語られる蛇の様な体を持った機械的な赤いドラゴン……『無双龍　ドラグレッダー』が居た。

ドラグレッダーの隣に居るのは同じ契約モンスター、蝙蝠型のモンスター『ダークウ

イング』とミノタウロスを思わせる牛のようなロボットの様なモンスター『マグナギガ』の姿も其処には有った。

　このミラーモンスター達は原典に存在する者達とは違い契約者を襲ったりはしないが、腹減ったと言う飢えた子犬の様な目で絶えず見られているのだから、流石に勘弁して欲しい。

「こいつ等の腹が減ったって言うから食事に来たら……獲物が食事中って所か」

　吐き捨てる様に言い切る。人が家畜を食べる様に、吸血鬼が人から血を吸おうが、人をくらう化け物が人を食べ様が、それは一つの食物連鎖……その辺については納得しているが、気に入らないものは気に入らない。何より、女の子を襲っている怪物など、四季にとって気に入らない事この上ない存在だ。

「つー訳だ。運が無かったな、はぐれ」

　四季に獲物として目を付けられた事、四季の目の前で女の子を襲っていた事……或いはその両方か？　どちらにしても、目の前の化け物……『はぐれ悪魔』と呼ばれる存在は運が無かったとしか言えない。

　四季はゆっくりと鏡へと片手を翳し、

「変身!!」

　その姿を変える。右腕にはドラグレッダーの頭を象った『龍召機甲ドラグバイザー』

を付け、騎士を思わせる甲冑を纏った姿……人であって人で無き異形の騎士『仮面ライダードラグナー』へと変わる。
カードデッキから抜き取ったカードをスライドさせたドラグバイザーに挿し込み、再びもとの位置に戻す。

『ＡＤＶＥＮＴ』

鏡の中から飛び出してくるのはダークウイング。それが背中に装着されると、マントを纏った騎士の様な姿へと変わる。ドラグナーが地面を蹴ると同時にマントはダークウイングの翼へと変わり、飛行能力を与える。
（……蝙蝠の翼って言うと悪魔……いや、絵的には吸血鬼の方が近いか、これは？）
翼を羽ばたかせながら彼はそんな事を考えてしまう。
廃墟に飛び込むと同時にドラグナーが拳を振り抜くと壁を突き破りながら、ドラグナーの拳がはぐれ悪魔の顔面へと叩き付けられ、そのまま頭部が地面へと転がる。残された体も力なく地面に倒れる。
（弱っ!?　っと、あの子は？）
殴り飛ばした手ごたえの残る手に違和感を覚えつつ、予想以上のはぐれ悪魔の弱さに

驚きながらも、被害者の少女へと駆け寄る。
（良かった、怪我は無いみたいだ。命に別状は無い……気絶しているだけか）
気絶しているだけと言うのは二重の意味で幸いだった。一つは彼女が生きている事、一つは目の前の惨状を見せずに済んだ事。
「っ!?」
そんな中、ドラグナーが後ろを振り向くと同時に背中からダークウイングが外れ、背後から迫ってきていた頭を失ったはぐれ悪魔の体を弾き飛ばす。
『フシャー……よく気が付いたな』
蜘蛛の様な下半身に口が現れ、そこから声が聞こえてくる。
「本体は下半身の方だったか。通りで手ごたえが無いはずだ」
ライダーの力と言っても行き成り頭部が吹き飛ぶのは流石に手ごたえが無さ過ぎる。恐らくは囮だったのだろう。
『グゥウウ……よくもオレの食事を邪魔してくれたな、貴様』
「食事ね……食物連鎖に意見する気はないけどな」

『ＦＡＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

　響き渡る電子音と共にはぐれ悪魔とドラグナーの間にマグナギガが現れる。
『貴様もそいつも、硬そうで不味そうだな。まあいい、お前を始末してそっちの上手そうな女を食ってやる』
「消えろ」
　ドラグバイザーを装着した右手をマグナギガの背中へと触れると、何の抵抗も無く彼の右腕はマグナギガへと吸い込まれていく。それと同時にマグナギガの全身が開く。右手から伝わるグリップとトリガーの感触。ドラグナーは躊躇無くそのトリガーを引く。
「エンド、オブ、ワールド」
　ドラグナーの宣言と同時に打ち出されるマグナギガの全身に装填された大量のミサイル。その光景に思わず言葉を失うはぐれ悪魔。確かに科学の力では悪魔は殺せないだろうが……物には限度と言うものが有る。
　視界を覆いつくすほどの大量のミサイル。小型とは言っても明らかに対軍用の兵器に分類されるほどの数を打ち込まれれば、無事で済むわけがない。……序でにそのミサイルも普通の兵器では無いが、そんな物ははぐれ悪魔には関係ない。
「ぎ……ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ!!!」
　オーバーキルと言うレベルの爆発音にかき消されたはぐれ悪魔の悲鳴が響き渡る。

「……取り合えず、食事が体のほうじゃなくて良かったな」
はぐれ悪魔どころか廃墟の半分を含めて跡形の無くなった光景を眺めつつ、ドラグナーはそんな事を呟く。
はぐれ悪魔の存在した跡に残った光の球体をドラグレッター、ダークウイング、マグナギガの三体が喰らっている。その光の球がミラーモンスター達の食事なのは分かるが、それが何なのかは深く追求はしない。……考えたら色々と怖い想像に繋がりそうなので。
食事を終えて本来の住処であるミラーワールドに戻っても良いと言うのに、ドラグナーを護衛するように留まり続けているモンスター達を横目に、変身解除の意思を込めてバックルからデッキを外す。
鏡の割れる音と共にドラグナーの姿が砕け、四季の姿が現れる。半分以上砕けた事で外からの月明かりが射し込み、彼女の姿が見えるようになる。眼鏡をかけたショートカットの少女。
「んっ……」
安全な所に移動させようとした瞬間に運悪く眼を覚ましてしまった彼女と目が合う。
「え？」
思わず眼が覚ましたことに一瞬行動が停止する四季と、三体のモンスターを引き差連

れた四季の姿に唖然とする少女。
「あっ、いや……オレは怪しい者じゃな……」
「い……いやぁぁぁぁぁぁ!!!」
悲鳴と共に殴り飛ばされる四季。……少々マヌケな構図だが、これが四季と彼女……『朝田　詩乃』との初めての出会いだった。

「……ごめんなさい」
「いや、気にしなくていいから」
彼女が落ち着くまで待つと廃墟から離れた公園のベンチでそんな会話を交わしていた。支度まで連れて行くと言う選択肢は流石に取れず、落ち着ける場所として選んだのが其処だった。
主に話したのはあの怪物と四季の従えていた三体のミラーモンスターの事……連動して仮面ライダーの事も話すことになったのだが、流石にライダーの事と切り離して説明するのは難しいと言う判断からだ。

四季の手の中に在るのは青いケース状のドラグナーへの変身アイテム『カードデッキ』……表面には龍の頭を模した紋章を中心に右に蝙蝠、左に牛を模した紋章が刻まれている。実益を兼ねたはぐれ悪魔退治に出た先でハグレ悪魔に襲われていた彼女と出会ったと言う訳だ。

「……それじゃあ、そんな怪物が居るって言うの」

「そっ、全部が全部人を襲うって訳じゃないけどな」

己の欲望のために主を裏切りはぐれ悪魔となった。と悪魔側は言っているが、無理矢理悪魔に転生させられ主の元から逃げた者もはぐれとされる。

原因のある主のほうでは無く全ての罪を転生悪魔の側に押し付けている悪魔側の判断には憤りを覚えるが、欲の為に主を裏切った者も存在している。

『悪魔が存続するためには貴族達の協力が必要』と言うのが主側に甘い悪魔の支配者階級……魔王の弁だそうだ。

彼女を家に送った後、念の為にマグナギガに彼女の護衛を任せる。同じ学校であった事もあり、命の危機を救った者と救われた者、そんな出会いであった四季と詩乃の間に交友関係が出来たのだった。

そんな詩乃との出会いから一年が過ぎ、その後も幾つかの出会い……その出会いを切欠にして四季としては色々と不安を覚えたくなる事情も知りつつも時は流れ、四季達は駒王学園の二年生に進学した。

そんなある日の事、

「……堕天使が動いていた様だけど」

そう呟いて鏡の中に居るドラグレッダーを一瞥する。

詩乃や彼女の後に出合うことになった他の友人達も神器（セイクリッド・ギア）を持っていた事から、それを危険視して襲おうとした堕天使を一人、つい先日始末した所だ。

四季にとって大切なのは身内……詩乃達だけであり、天使だろうが悪魔だろうが、彼女達に害を成すのならば始末するだけ、そう言ってしまうとその堕天使も運が悪かったと言う事だろう。

……ミラーモンスター達にとっての食事を得る為に倒す必要が有るのは、はぐれ悪魔だけ出なく悪魔や天使、堕天使も含まれているのだし。

「あの女は何やってるんだ？」

思い起こすのは一度だけ接触したこの町を管理していると言う女、『リアス・グレモリー』の事だ。

何度かドラグレッダー達の餌として駒王町に侵入したはぐれ悪魔を狩っていた時に出会った訳だが、出会ったのはその一度だけで、それ以外は現場で出会うことは無かった。単純に向こうの調査が遅れていて、四季が先に動いただけならばまだ良い。そもそも、戦闘時以外ドラグレッダー達がミラーワールドの中から休み無く動き回って調べている四季の探索能力と比べる時点で間違っている。しかも、理屈は不明だがドラグレッダー達は人外の存在に対する高い嗅覚を持っている。

だが、今回は堕天使の勝手な行動を許している……させている時点で悪くて『無能』、良くて『侮られている』と評するしかないだろう。

堕天使達の行動の結果、悪魔と堕天使の間で戦争になるだけならば四季としては放置しても構わないのだが、堕天使の中から詩乃達を狙った者が出た以上、放っておくわけにはいかない。

……最悪、堕天使と言う種族そのものをドラグレッダー達の餌にすると言う事も考える必要がある。

……どうも堕天使の総督は『神器持ちの人間を殺して無理矢理神器を奪って蒐集（コレクション）し

ている』とか、『神器持ちの人間を誘拐しては研究材料にしている』等と言う悪い噂を聞いていれば多少思考が危険な方に偏ってしまう。

「チッ、ここが魔王の妹の領土だから、来る訳がないなんて思ってるんじゃないだろうな……？」

まあ、無能であったとしても被害が四季だけ……それも変身後のドラグナーの姿だけで止まっている以上はリアスの事は現状では無視しても良い。はぐれ悪魔や堕天使の事も、リアスを舐めてはぐれ悪魔が入り込むのも、ドラグレッダー達の餌が寄ってくるという点だけでは益である。

町の人々全員を守ると言う考えは四季には無い。所詮どれだけ力を手にしても人間である以上、伸ばせる手の数も距離も限られている。その範囲に確実に居るのは詩乃達だけで有って、それ意外は偶然助かる……偶然助けられた者が四季が助けられる範囲に居る、それだけだ。

そんな訳で四季にとってはリアスの対応の遅さは『ドラグレッダー達の餌』を放し飼いにしてくれて居る様な物だから、迷惑ではない。……流石に『此処は私の領地よ』なんて言って来た時には腹が立ったが。

それ以上考えても仕方ないと断じて四季は鞄を手にとって学園へと向かう。……向こうが手を出したら問答無用で餌にすると、先手こそ譲るが容赦の一切ない決断を下す

のだった。

「なに!?　覗き穴を見つけただと!?」
「おお、あそこなら絶対に見つからないぞ!!!」
「「うぉぉぉぉぉぉ!!!」」
　そんな事を大声では成している通称『変態三人組』と呼ばれている三人……一見好青年なバカっぽい青年『兵藤　一誠』と、一見爽やかなスポーツ少年と一見真面目っぽい眼鏡君の『松田』と『元浜』。
　登校早々そんな絶叫を聞かされるが、関わりたくないと思いながらさっさと自分の席に着く。その言動からその三人の辿る事になる未来を想像しながら溜息を吐く。場所こそ明言していないが、大抵は普段利用している者達なのだからそんな話をされているならば、位置くらいは幾つか予想は出来るだろう。
　昼休み、校舎裏に有る木の枝に座りながら昼寝していた四季の耳に絶叫が聞えてくる。

『待て!!!　この、覗き魔共ぉ!!!』

　声のした方に視線を向けると想像通り大勢の女生徒に追いかけられている三人の姿があった。大勢の女の子に追いかけられるというシュチュエーションはある意味彼等の望んだ状況なのだろうが、殺気に満ちた武器を持った女子に追いかけられると言うのは流石に望んでないだろう……。

　四季の居る木の下を三人と彼らを追いかける女生徒達が走り去って行くと枝から飛び降りる。流石にこう騒がしくてはゆっくり昼寝もしていられない。

「（屋上にでも忍び込むか）よっと」

　三人組と女生徒達と入れ替わる形で枝の上から飛び降りると午後の時間を使って昼寝でもしようと屋上へと足を運ぼうとした時、

「それで、何処に行く気なの?」

「っ!?」

　思わず後ろから聞えてきた声に驚いてゆっくりと其方へと視線を向ける。

「し、詩乃さん?」

「最近ずっと午後の授業をサボっていて生徒会から注意されてるって聞いたけど……ど

う言うことか答えてくれるわよね？」
「え、えーと、それはですね……」
『私、怒ってます』と言うのがよーく分かる笑顔を浮べている彼女に冷や汗を流しながら後ずさる四季。
「刀奈先輩達も交えてじっくり説明して貰うわよ」
「ぜっ、全員に知られてる!?」
「うん」
思わず見惚れてしまいたくなる笑顔で言い放たれた肯定の言葉に、後者裏に四季の絶叫が響き渡るのでした。

???
「いてて、酷い目にあったぜ」
フッフッフッ、駒王学園の変態三人組の一人『兵藤　一誠』って言うのは仮の姿……実はオレはハイスクールＤ×Ｄの主人公一誠に転生した転生者なんだ！

残念ながらオレを転生させた神が言うにはオレに与えられた特典は二つ。……だけど、特典は自由に選べなかったし、二つとも転生した後でその内分かるって言いやがったんだ！　未だに何が特典なのか全然わかんないぞ、ちくしょー！　だけど運良くオレは主人公の一誠に転生できた。……試してみたら原作どおり、多分赤龍帝の籠手がオレの手に!!!　ひゃっほー、美少女全部主人公であるオレの女だぁ!!!

しかも、遠目で見たらインフィニット・ストラトスの更識楯無までいるじゃないか!?

こりゃ、探したら他のヒロインも居るんじゃなかろうかぁ!?　原作異常のハーレムゲットで良い感じー！　今は駒王学園の二年生……もうそろそろ原作が始まるぜぇ!!!

テンション、上がってきたぜぇー!!!

そうと決まったら、早く転生特典って奴を探さねば!!!　ってか、早く力貸してくれよ、ドライグー！

『……え？　こんなのがオレの当代の相棒なのか……？』

某所に心底現状を嫌がっているドラゴンが居たとか。

一誠（転生者）ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「ん？　どうした、ドラグレッダー？」
　ミラーワールドの中に居るはずのドラグレッダーが、何処かの誰かへと同情する様な遠い眼を向けているのが見えた。何故か何処からとも無く取り出した龍騎のカードデッキ……に似たデザインのスマフォを取り出してメールをしている所を見た事があるし……最近、この無双龍の事が良く分からなくなってきた四季である。
　ドラグレッダーが言うには最近メル友が出来たらしいが……ミラーワールドから電波って繋がる物なのだろうか……？
「……まあ、深く考えないで置こう」
　刃みたいな爪で器用にスマフォを操作しているドラグレッダーから視線を逸らしつつ、都合が悪くて来れなかった人達の分まで詩乃から最近のサボりについて注意され、罰として今度の休みにデートする様に言われたのだが……。
「別にデートなら罰じゃなくてもいいのに」
　心底そう思う四季だった。デート費用の全額負担も、デート費用など自分が出しても良いのに、などと考えている辺り罰になっていない。
（……そう言えば堕天使の事はどうするかな？　今の現状を考えると悪魔に罪を着せる、って手も出来そうに無いし）

流石に単独で行動しているとは考えづらいために多少は警戒して探していたが、どうしても足取りが掴めていないのが現状だ。幸いにも、堕天使が好んで利用する場所は目星を付けているが、流石に敵対勢力の勢力圏にあるそんな分かり易い所に罠も仕掛けずにいる訳も無いと考えているが、本命には間違い無いと考えている。

すっかりと身近な悪魔側に対する対策を考えていたために忘れていたが、堕天使の方の事も考える必要がある。そもそも、悪魔側の領域で活動しているのだから、始末した所で堕天使ＶＳ悪魔の構図で勝手に戦争になるだけと言ってしまえばそれまでだが、現状を考えると色々とそう簡単には言えない。

（……難しい事抜きにしてこの町の堕天使の拠点にエンド・オブ・ワールド撃ち込めれば楽なんだけどな……）

確かに跡形も無く吹き飛ばせれば楽だが、それはそれで色んな意味で問題があるだろう。破壊力と規模的な意味でも。

先ず、廃屋が跡形も無く吹き飛ぶ程度ならば、精々この町を管理していると言っている悪魔側が苦労する程度で済むだろうが、大量のミサイルの爆発音は流石に、こんな町のど真ん中で起こったらこれ以上無く目立つ事だろう。

第二の問題として敵の数だ。堕天使がどれだけいるか分からないが、全員が其処に居るタイミングで無いと纏めて吹き飛ばす事ができない。生き残りがさっさと本拠地に

逃げてくれればいいが、下手に暴走されると面倒な事になる。
前者は悪魔側が苦労する程度だが、問題は後者……敵である堕天使の数とその配下、そして目的を調べなきゃ迂闊に行動できない。
「もう少しだけ様子見って所だな」
飽く迄自分の身内に被害が無ければ最悪は放置しても何一つ四季にとっては問題は無いが、それで身内に悲しい顔をされるのがイヤだから被害が出る前に叩き潰す。それだけだ。

ep. 002

（何が目的なんだろうな……？）

遠い眼をしながらそう思ってしまう。この町にいるらしい堕天使が一人兵藤一誠に接触して殺そうとして失敗したらしい。昨日まで出回っていた一誠に彼女が出来たと言う噂が跡形も無くなった事、そして……

（元気そうだな、何時にもまして……）

『ぐっふふふ……』等と不気味に笑っている一誠を眺めながらそう思ってしまう。一誠が堕天使と何らかの取引をして生き延びたとも考える事が出来るが、悪魔でそれは可能性の一つだ。妙に喜んでいる一誠の様子からするとそれも有り得る。

（……詩乃達に一誠に近付かないように伝えておくか）

色んな意味で危ない一誠の姿にそんな事を思ってしまう。

「ん？」

ふと窓ガラスを見てみるとドラグレッダーが一誠とダークウイングを指差している姿が見える。

（……一誠、ダークウイング？　いや、蝙蝠？　一誠と蝙蝠……一誠が蝙蝠……蝙蝠……

悪魔？　一誠が悪魔？）

連想ゲームの様な状況だが、ドラグレッダーが指し示すキーワードから連想するのはそう言う事になる。四季がそんな事を考えていると窓ガラスに映るドラグレッダーも頷いている。

（まあいいか）

其処まで考えた後、あっさりと切り捨てる。そもそも、四季は一誠とはそれほど親しくは無い。例え悪魔に転生していたとしてもそれほど一誠と係わり合いになることは無いだろう。

（……警戒するのはあいつの主人の悪魔か）

早急に始末する必要のある堕天使もそうだが、此処の管理をしていると言う悪魔達も監視はしている。流石に大人数を監視しきれないと言う点から相手の拠点をミラーワールドから監視しているだけだが、それでも情報を仕入れるだけならば十分だろう。

（……流石に今の契約モンスター達とオレだけじゃ全部を敵に廻すって訳には行かないからな）

忌々しさを浮べた表情を窓へと向ける。手持ちのカードはドラグレッダー、ダークウイング、マグナギガと己自身である仮面ライダードラグナーのみしか居ないのだ。

今すぐにでも攻め込みたい別の町にある、とある悪魔の拠点の位置も場所も分かって

いるのに攻め込むだけの戦力が無い現状に苛立ちを覚える。
（……いや、もう一体……と言うか一組もいたな）
『ギガゼール』と名付けられた三体のゼール型のミラーモンスター。戦力では無く数を活かした監視と調査を担当しているモンスター達なのだが、純粋な戦闘力を重要視した役割では無くどちらかと言うと監視と調査を担当して貰っているために下手に戦力に数えて其方の手を緩めたく無いと言うのが本命でもある。
一体は学園に居る悪魔達の監視と諜報活動、一体は前述のとある悪魔の拠点の監視、最後の一体は現在は堕天使のいる廃教会の監視に勤めてもらっている。
そんな怪しさ満載の一誠に警戒する視線を向けつつ、時は過ぎ去り放課後となった教室で、警戒対象である一誠が変態三人組と呼ばれている仲間の二人……松田と元浜とＡＶ談義をしていると、
「やぁ、君が兵藤君だね。リアス部長が呼んでいるんだ。悪いけどぼくについてきてくれるかい？」
同じ学年の生徒で成績優秀、スポーツ万能とイケメン王子と呼ばれて女子から人気の『木場　祐斗』が一誠へとそう声をかける。
「リ、リアス先輩が!?」
「？」

……悪魔に転生した可能性が有る事から、一誠をリアスが呼んでいることについては特に何も思わないが、問題は別に有る。演技では無い事は分かるが……一誠の驚き方には多少の違和感を感じる。

（……まあいいか）

『三大お姉様』と呼ばれ学園内で男女共に人気のある先輩の一人からの呼び出しにウキウキとした様子で、木場の後を突いていく一誠を一瞥するとダークウイングへとリアス達の監視を頼むと鞄を手にとって四季は教室から出て行く。

「そんな！　天宮君なら分かるのに、お姉さまがあんな変態に何のよう!?」

「どうして、あの変態が!?」

「なんで兵藤なのよ！」

「うううぅ……木場くんと天宮くんとのツーショットなら絵になるのに」

一部の女子がそんな会話を涙を流しながら話している。……どうでも良いが四季も四季で女子から人気がある。

ライダーとして鍛えた身体能力でスポーツは万能、普段から詩乃達に教えられている為に成績は優秀……普段の不良っぽい印象からワイルドで格好いいと人気がある。

三大お姉様の一人である『更識　刀奈』と同学年の詩乃と仲が良いために女子から近寄りがたいと距離を置かれているが。（やはり浮いた話が無く、フリーのほうが人気が

出るということなのだろう）

『何でアイツだけがぁぁぁぁ!!!』と絶叫しながら悔し涙を流している元浜と松田を横目にさっさと教室を出て行く。……今日は詩乃と刀奈の二人と一緒に帰る約束をしているのだ。

「あー、やっぱりあいつは悪魔になってたか」

ダークウイング達の話（筆談）を聞きながら改めて推測が正しい事を確認する。一誠は彼の持つ神器（セイクリッド・ギア）を危険視した堕天使に殺された際、本来ならば眷族の誰かが呼ばれる所を主であるリアスを呼び出し、その結果悪魔に転生した様子だ。

オカルト研究部の会話を聞く限りでは一誠を殺した堕天使は『天野　夕麻』と名乗っていたらしいが、恐らくは偽名……一誠に近付くために名乗っていたその場凌ぎの偽名だろう。

「……それほど有意義な情報は無いか」

どうもこの町を管理していると言っている悪魔側はまだ堕天使に対して対処する気

は無いらしい。

……仮にも魔王の妹が二人も居る町で活動している事は大胆不敵とでも言うべきだろうか。……逆に言えば魔王の妹……世襲制では無いとは言え、相応のＶＩＰである以上迂闊に堕天使への攻撃は出来ないだろうと読んでいると考えているべきだろうか。

それとも、単純に二人とも身内の七光りで管理者になっただけの（人間の年齢で）子供程度と侮られているのか。

どれが原因か定かでは無いが将来的に悪魔側に敵対する理由がある四季としても、此処が一番活動し易いと考えて活動拠点に定めているわけだ。……要するに、悪く言ってしまえば四季にも、堕天使にも、はぐれ悪魔にも〝舐められている〟と言う所だろう。

「まあ良いか。……今は怪物退治の方を優先しようか」

そう呟いてカードデッキを手に取ると窓に映るドラグレッダー達三体へと視線を向け笑みを浮かべる。

この町に残っている堕天使をどうするかについては放置も出来ないが、なるべくならばリアス達が堕天使の行動に気付いてからの方が動きやすい。……後始末を向こうに押し付けるという意味でも。雑魚散らし兼廃墟の撤去としてヤツラが拠点にしている廃教会にエンド・オブ・ワールドでも撃ち込んで更地に変えれば嫌でも動いてくれるだろう。

はぐれエクソシストの駆除

『が……ガァ……』

とある廃墟、己の前に倒れる人間の女の上半身に獣の首から下を下半身に持った様な外見のハグレ悪魔『バイザー』を見下ろしながら、ドラグレッダーを従えた四季……ドラグナーはドラグレッダーの尻尾を燃した青龍刀の様な剣『ドラグセイバー』の一閃でトドメを刺す。

例によってバイザーを倒した際に現れた球体をドラグレッダー達三体が捕食している。どのモンスターも強力とは言え、流石に複数契約は食事等の問題がある。

（……その内、ゼール達にも食わせてやらないとな）

どうも諜報活動をさせている為に食事させるタイミングが中々取れないゼール達の事を考えると思わず頭を抱えてしまう。

「ん？」

ドラグレッダーの食事が終ると足音が聞えてきた。恐らくはリアス・グレモリーとその眷属達だろう。

「あら、久し振りね。会いたかったわ、謎の騎士（ナイト）さん？」
「此方は会いたくなかったがな、七光り」
　口調こそいつもと変わっていないが睨み付けるような視線でドラグナーを睨みながら出口を塞いで堂々と立っているリアス・グレモリーとその眷属達……その眷属達の奥に居る一誠は驚愕の表情をドラグナーへと向けていた。
（おいおいおい、何で仮面ライダーが此処に居るんだよ!?　しかも、あそこに居るのはドラグレッダーだろ、仮面ライダー龍騎の契約モンスターの!?　もしかして、あれがオレの貰える筈だった転生特典か？）
　一誠はドラグナーを見ながらそんな事を考えている。
（そうか、オレが仮面ライダーに、龍騎になる筈だったのに、あいつがオレの特典を盗みやがったのか？）
　そう考えて一誠は憎悪の篭った視線でドラグナーを睨み付ける。……そんな一誠の心境に気付かずリアスは目の前に立つドラグナーへと言葉を続けた。
「今日こそは聞かせてもらうわ、貴方が何者なのかを」
「答える義務は無いな」
「義務なら有るわ。前にも言ったけど、私は此処の土地の管理を任されてるのよ、貴方みたいな正体不明の不審者を拘束するのは当然よ」

「ならオレも前にも言ったが、お前達悪魔の都合なんて知った事じゃない」
『俺は悪魔じゃないんでな』とリアスの言葉に嘲笑するように言葉を返すドラグナー。
……近場の鏡面は既に確認している。以前同様に適当に挑発しつつ攻撃を誘導してその隙にミラーワールドに飛び込めばいい。
「そうね、今日こそ聞き出させてもらうわ。祐斗」
「はい、部長。悪いけど、今日こそ倒させてもらうよ」
何処からとも無く剣を取り出し向かって来る木場だが、無差別に打ち込まれるドラグレッダーの火球の前に足止めされてしまう。彼の駒は騎士、いかに早いと言えども回避しきれない広範囲の攻撃と足場の破壊によって一時的に動きを止めることが出来る。
「悪いが、正面からバカ正直に迎え撃つわけないだろ?」
ドラグレッターの爆撃に紛れて使用した『ストライクベント』のカードで召喚した『ドラグクロー』を構え、
「はぁぁぁぁぁぁ!」
「かはぁ!」
カウンターの形で爆煙の中を飛び出して来た白い髪の小柄な少女『搭城　小猫』に炎を纏ったドラグクローを叩き付ける。
「バレバレだ」

正しく言うとグレモリー眷族側にある鏡面からダークウイングとマグナギガで相手の動きを監視していた結果だ。彼女の駒の特徴の防御力と攻撃力を活かして正面から突っ込んできた様子だが、タイミングさえ掴んでしまえばカウンターを与える事は容易い。

「序でだ」

「かはぁ！」

同時に吹飛ばされる寸前の彼女に廻し蹴りを叩き込み、真上に蹴り上げると真上からドラグナーへと向かっていた『姫島　朱乃』の雷を彼女が変わりに受けることになる。

《シュートベント》《シュートベント》

その隙に新たに二枚のカードを取り出してドラグバイザーに読み込ませる。態々多対一で一人ひとり相手にする必要は無い。

「面倒な戦いは好きじゃ無いんでな」

「「なっ！」」

（おいおい、あれってゾルダの武器だろ!?　あいつ、ゾルダのモンスターとも契約してるのか!?）

両肩にギガキャノンを装着し、ギガランチャーを構えたドラグナーの姿に思わず驚愕するリアス達（一誠はちょっと違う意味で驚愕しているが）を他所に、無情にもドラグナーはギガランチャーとギガキャノンの全弾と、オマケとばかりにドラグレッダーの火球を発射する。

「きやぁぁぁぁ!!!」

「うわぁぁぁぁぁ!!!」

原典の世界では並のミラーモンスターならば一撃で粉砕する破壊力を持つ弾丸が打ち出される中、慌てて迎撃するリアスと朱乃、二人の迎撃し切れなかった弾丸を防ぎきれないならばと大量の剣を作り出してそれを盾として防ぐ祐斗。

「さ・よ・う・な・ら」

……一通り弾を撃ちつくした後、この場でトドメをさす気も無いのでさっさと近場の鏡面からミラーワールドへと飛び込む。

ドラグナーによる一斉射撃が止んだ後、その場には必死に砲撃を防いでいたリアス達一同の姿があった。

爆撃の直後に姿の消えたドラグナーに対して奇襲を警戒しながら廃墟の中を探していたが結局見つけることが出来ず、悔しげに苛立ちながら帰っていった。

「……まったく、また面倒な事になりそうだな」

ミラーワールドの中から己を探すリアス達を眺めていたドラグナーはそう呟く。
「……それにしても、兵藤一誠。あいつ……なんで鏡を?」
ふと、そんな疑問が沸きあがる。一誠の行動に妙な違和感を覚えていたのだ。……鏡、鏡面となる所を見たと思ったら、鏡面を態々一つ一つ消していた。……ドラグナーの、ミラーワールドで活動するミラーワールドのライダーの能力を知っているかのように、だ。
「……まあ、別にどの鏡面からでも出れるから問題は無いけどな」
カードデッキを渡した相手曰く、変身してさえ入ればどの鏡面からでも自由に出入りできるらしく、活動限界時間もなくなっているそうだ。
（……兵藤一誠、アイツは仮面ライダーの事を知っている?）
そんな呟きがミラーワールドの中に響くのだった。

ep. 003

「ったく」

何時もの様に授業をサボって屋上で横になりながら四季は思わず悪態を吐く。どうも先日のはぐれ悪魔の一件からリアスとその眷属達が使い魔を使ってドラグナーを探しているらしい。

恐らくドラグレッダーの様な大型のドラゴン……東洋龍を簡単には隠せないと考えて探索しているのだろうが、四季にしてみれば無駄としか言えない。流石に普段はミラーワールドで活動しているミラーモンスター達を現実世界だけの探索では見つける事は出来ないだろう。

どうせならば自分の領土に潜伏している堕天使相手に何らかの行動に出て欲しいと思っているが、残念ながらその様な動きは見られない。流石に現在冷戦状態の三大勢力の間では挑発行為は兎も角直接的な被害を出しては戦争に転びかねないと言う所だろう。……あれだけ探索していて気付いていないのなら、それは単なる無能だ。

（……身内贔屓で無能な奴に管理なんてやらせるほど現魔王の一人もバカじゃないだろう）

だからこそ四季は三大勢力間の問題で手が迂闊に出せないのだろうと推測している。戦争を望んでいる勢力が他勢力の領域で何らかの行動を取るのは戦術としては間違っていない。……その結果迷惑を被る側としてはたまったものではないが。

（……チッ、堕天使は最悪オレが残らずドラグレッダー達の餌にするしかないか）

そこまで考えた後、ふと四季は一誠の様子に疑問を覚える。

（……カードデッキの事を知っている様に思ったけど、思い過ごしだったか？　……いや、あいつも自分の主に報告していない、それだけか？）

思い過ごしだとすれば、先日の……態々鏡面を消して廻っていた行動が説明できない。寧ろ此処は何らかの思惑を持って報告していないと考えるべきだろう。

「さて」

そろそろチャイムが鳴る頃だろうと考えて立ち上がると校舎の中に入っていく。何時までも此処に居て生徒会や詩乃達に捕まるのはゴメンだとばかりにチャイムが鳴る前に授業をサボっていた事がばれない様にさっさと校舎の中に向かったのだが、

「はぁーい、こんな所で何をしてるのかな？」

「カ、刀奈姉」

三階に下りて早々に捕まってしまった四季君なのでした。ゆっくりと振り返りながら再度逃げ出そうとするも、

「ねえ、言ったわよね、授業にはちゃんと出なさいって」

しっかりと四季の肩を掴んでそう告げる詩乃さんの姿が。二人とも笑顔では有るが、間違いなく起こっていると確信できる表情。

（ま、拙い……拙い拙い）

己の置かれている状況に真っ青になりながら何とか現状を打破できないかと考えているが……ふと、窓に映るドラグレッダーとダークウイングが『フッ』と言う笑いを浮べているのが目に入った。

（お、お前達かぁー！）

それが二人に密告（チクった）したのが己の契約モンスター達だと確信した瞬間。

……どうも、魔王の妹やその眷属達よりも二人の人間の少女の方が怖い四季であった。

常に四季の近くに居るドラグレッダー、ダークウイング、マグナギガの三体では有るが、実は三体とも四季だけでなく詩乃や刀奈の言う事も聞く。……と言うよりも場合によっては二人の言う事の方を聞く。今回もモンスター達に四季が授業をサボらない様に監視を頼んでいたらしい。

「……酷い目にあった」

放課後に二人から散々説教された後、用事が有ると言う二人と分かれて一人で帰宅途中な訳である。念の為に二人にはダークウイングとマグナギガの契約のカードを渡してあるので、何か有れば容赦なく悪魔だろうが堕天使だろうが餌にしてくれる事だろう。

「まあ、取り合えず……」

自分の目の前に居るドラグレッダーと戦っている女を一瞥し、カードデッキを手に取る。『悪魔臭い』だの、『神器（セイグリッド・ギア）持ちだな？』等と言って襲い掛かってきてくれた女に容赦なくドラグレッダーが火球を叩き込んだ訳である。

戦闘では無く一方的な蹂躙では有るが、流石にグレモリー眷属の監視網に引っかかりたくは無いが、獲物が向こうから出てきてくれたのだ、見逃してやる手は無いだろう。

「変身！」

鏡面へと翳したカードデッキ、それに合せて出現する変身ベルト《Ｖバックル》。叫びと共にバックルへとカードデッキを差し込んだ瞬間、ドラグナーの鏡像が四季と重なり彼の姿を仮面ライダードラグナーへと変える。

《ソードベント》

……まあ、態々向こうから出てきてくれたのだから、この機を逃す手は無い。詩乃や刀奈が被害を被る前に確実に始末しておこうと考えながら、ドラグセイバーを構えながらドラグレッダーにボコられている堕天使の女に近付いていく。

「さて、害獣駆除でもするとするか」

《無双龍》……並び立つ者が居ないが故に《無双》。自ら二天を超える龍と宣言しているドラグレッダーの二ツ名だが、その力はその名に恥じないだけのものを持つ。

「さて、害獣駆除とでも行くとするか」

「……ッ!?　虫けらが!!　堕天使である私にそんな口の聞き方をしてただで、ギャァー!!!」

ドラグナーの言葉に激昂する堕天使の女がドラグレッダーの火球によって再び吹飛ばされる。

「どっちが虫けらだよ?　まあ、オレもタダで済ませる気は……一切ないがな」

「貴様、ガァ!!」

這い蹲っていた堕天使が光の槍を手に立ち上がり襲い掛かろうとするが、それよりも

早くドラグナーが顔面を蹴り飛ばす。
鼻が潰れ前歯も何本か折れ、ドラグレッダーによって片翼まで失った姿は、元々がそれなりに美人と呼んで良い姿だけに、惨め過ぎる光景に映るだろう。続いて自らの血と砕けた歯の破片が混ざり合った物へと向けて吐き出す堕天使の後頭部に踵落しを叩き込み、自らの吐瀉物に叩き付けられると、それが撒き散らされたアスファルトに小さなクレーターができる。
「き、貴様……わ、私にこんなマネを、して、アザゼル様が……」
「黙ってないなら後で始末してやるから神器マニアと地獄で仲良くな」
堕天使の言葉に冷たく言い切りドラグセイバーを脳天に振り下ろす。堕天使は屍ではなく羽を残すというがやはりモンスター達の餌となる球体は別の様子だった。空中に浮かび上がる光の球体を飲み込むドラグレッダーを眺めながらそんな事を思う。
「……ダークウイング達の分どうするかな？」
今回の堕天使は予定外の遭遇戦とは言えドラグレッダーばかりに最近食事を与えているのが気になるドラグナーだった。
本人は高貴だなどと言っていたが単なる下級の堕天使だったのだろう、生命エネルギーの捕食を終えたドラグレッダーも『食べたり無い』とでも言う様な顔をしている。
下級の堕天使ではその辺のはぐれ悪魔と大差ない程度の価値しかない、栄養的に。

ゼール軍団には十分なエネルギーでも強力なモンスターに分類されるドラグレッダーには全然足りないらしい。……しかも、ドラグレッダーは好みでは無いらしく微妙な顔をしているが……

（有るんだな、味って）

どうやら生命エネルギーにも味はあるらしい。

「よっ」

サッサと鏡面へと飛び込みミラーワールドへと移動する。それなりに派手な戦いをして見せたのでグレモリーの探索に引っかかる可能性は高いのだ。

ドラグナーにとって賞金が掛かっているはぐれ悪魔と違って堕天使には其方の価値が無いので、残された羽は放置していく。後始末はこの町にいる悪魔が何とかしてくれる事だろう。

グレモリーの眷属が其処に着いた時にはドラグナーの姿は無く、堕天使の存在だけを伝える黒い羽だけが残されていた。

「今度は堕天使ね」
オカルト研究部の部室……紅い髪の女性『リアス・グレモリー』は何処か苛立ちの篭った声で黒い羽を弄びながら呟いた。
「私の領土でやってくれるじゃない」
全てはこの町に存在しているドラゴンを従えた正体不明の騎士甲冑の男……『ドラグナー』に対する苛立ちである。
当然ながらドラグナーへの変身については監視に引っかからないようにドラグレッダーを通じて確認していた。ドラグナーに変身後の移動は基本的にミラーワールドを介しての物であり、ミラーワールドや仮面ライダーに関する知識を持ち得ないリアス達には直接変身する姿を見られなければ正体はばれないだろう。ミラーワールドへの移動だけに限定すれば鏡を媒介とした魔術の一種と誤認しかねない。
「一誠は一誠で教会に近付いてしまうし」
そう考えると頭の痛い思いのリアスだった。自分の領土内で堕天使が何者かによって抹殺された……それは悪魔側の仕業と誤認されかねない。悪魔である一誠が天界の領域である教会に近付く事も光の槍が飛んできても可笑しくない。
まあ、一誠の行動は何事も無く済んだので次から近付かないようにさせれば良いだろうが、問題はこの町で抹殺されてしまった堕天使の方だ。最悪それを行なった犯人が分

からなければ戦争の火種になりかねない。
早急にドラグナーの捕獲或いは最低でも正体を暴かなければ拙い。

「アーシアアアアアアアアアア!!!」
翌日……一誠は仲良くなった少女『アーシア・アルジェント』を自分を殺した堕天使に攫われていった事で叫んでいた。
（畜生、ふざけるなよ！　オレは主人公のはずだろう!?　一誠よりも上手くやれるはずの主人公だろうが、オレは!!!）
自分に危害を加えさせないために彼女が大人しくついていった事に絶叫していた。
（赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）が有れば負けないだろう、あんな最初の敵なんて!!!　くそっ、まだ目覚めて無くてもオレの転生特典が有れば!!!　アイツが龍騎のカードデッキを！　主人公のオレが持つはずだっただろう、あれは!!!　あれさえあれば、仮面ライダーになれれば、オレがこんな惨めな思いなんてする筈無かったんだ!!!）

その憎しみを堕天使だけでなく、ドラグナーへと向けていた。

ep. 004

それはゆっくりと意識を覚醒させる。《ハイスクールD×D》と言う世界の主人公に憑依した、既に自分の過去の名前の記憶すらない転生者の為に用意された転生特典の一つとして誕生……否、再誕した。

（よし、この世界ならば再び……）

《蛮野　天十郎》と言う男の人格と頭脳をコピーしたベルト、通称《バンノドライバー》に宿るモノは己が何者なのかは辛うじて自覚しているが、それが本物の蛮野であるかは定かでは無い。だが、この世界には蛮野と言う人間は存在して居ない。ならば、己こそが唯一無二のオリジナルだと確信する。

『へ？』

ならば己の目的は一つ。そう定めた所で……外の光景を視界に写すと、バンノドライバーはマヌケな声を上げて言葉を失った。

「逝っていいよ、って言うか逝っちまえ」

『え？』

信号機と斧の合成態の様な武器を振り上げた青い騎士甲冑の様な物を纏った仮面ラ

イダーが目の前に居た。
『ま、待て待て待て!!!　待つのだ！　偉大な私の……』
「死ね」
慌ててかってオリジナルが己の息子に対してした様な上から目線の命乞いさえさせてもらえずに真っ二つにされるバンノドライバー。冷酷に言い放つと真っ二つになったバンノドライバーをミラーワールドに投げ捨てて周囲の景色を眺める。
「……さてと、これが転生者の転生特典って奴か？」
彼、ドラグナーはドラグナーのデッキと勘違いしている兵藤一誠に転生した男の本当の転生特典に目を向ける。……もっとも、ドラグナー……四季はそれが一誠の転生特典などと認識はしていないが。
同型のベルトが二つに先ほど破壊したベルトと同型と思われるベルトが二つ、合計四つのベルト。白と紫の二台のバイクに黒と赤の二台の車……。ドアのような銃を初めとする先ほどバンノドライバーを破壊した斧『シンゴウアックス』等の武器の数々、トランクの中に入っているのはミニカーの様な物の数々。
四季のドラグナーのカードデッキよりも新しいライダーシステム、『仮面ライダードライブ』の力の一式が目の前に存在していた。
「カードデッキの方が便利だな、携帯性が」

妙な感想を呟きながら目の前のベルト残り四つに視線を向ける。流石にファンタジー色の強い龍騎と科学サイドの技術で産まれたドライブなのだから、当然ながら携帯性の差は出るだろう。

自分に科学側の知識が有れば安全か確認してから自分で使うのも有りだが、残念ながらドラグナーに其処まで科学的な知識は無い。破壊するしか道は無いだろう。

「とりあえず、他のベルトも壊しとくか」

何か仕掛けが有るかもしれないと思ってそう判断する。壊した後はミラーワールドに捨てとけば誰にも回収できないだろうと推測しておく。

念の為にドラグレッダーによって焼いてしまえば更に問題ないだろう。現に先ほど叩き壊したバンノドライバーもドラグレッダーが火球をぶつけて焼いている。

《ストライクベント》《ソードベント》

腕に装着するドラグクローと車の近くに突き刺すドラグセイバー。一つ一つ壊していくのが面倒になったので、車とバイクとベルト纏めて壊すことにしたドラグナーだった。

ミニカー達と武器類はミラーワールドに投げ捨ててマグナギガとドラグレッダーに

纏めて破壊してもらえば楽に終る。

『待て！　待ちたまえ！』

そう呟きながら早速変身用のベルトを破壊しようとしてとりあえず赤い車《トライドロン》のボンネットに叩きつけようかと思ってベルトに触れた瞬間、ベルトから聞えた声に止められる。

流石に一切の交渉も無く問答無用に壊されるのには誰でも普通に慌てる。まあ、ドラグナーはドラグナーで『またか』と斬り捨てる。

……それが四季と彼ドライブドライバーに宿る意識、通称《ベルトさん》のコピーとの出会いだったりする。

まあ、

『頼む、先ずは私の話を聞いてくれー！』

「せーの」

ドラグナーがトライドロンに自分を叩きつけようと勢い良く振り回している現状では、一刻も早くドラグナーを説得しなければ拙いだろう。一切聞く耳を持たなかったドラグナーに話を聞いてもらうのにベルトさんの必死の説得があった事を追記しておく。

ベルトさんの最大の不運は一誠の転生特典であった事だろう。四季の他人の転生特典に対する感情は『念の為に破壊する』であるのだから。

『だからちょっと待ってくれー!!!』

さて、何故四季が此処を発見できたかと言うと町中を調査させていたダークウイングからの報告である。明らかにこの世界の技術力を超えた物……四季のカードデッキ並のオーバーテクノロジーを見つけた事が原因だった。

本来手に入れる者が見つける前に発見できたのは幸運だったと思う。どんな強力な武器であっても使うものが居なければ意味が無い。……例外はバンノドライバーなのだろうが、不意打ちの一撃で即座に葬った。最悪破壊は無理でもミラーワールドに捨てれば封印にもなる。

そんな訳で、ダークウイングが偶然見つけたドライブピッドを調べ、転生特典の可能性が高いと確信し、こうして破壊作業に勤しんでいた訳である。

そんな中、本来ドライブの力を得るはずだった一誠に憑依した転生者はと言えば、

「ぶっ飛びやがれぇ!!!」

「ぎぃ、ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

一誠の神器（セイクリッド・ギア）の覚醒した姿である赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）を纏った腕での一撃がかつて一誠を殺し、アーシアを連れ去った堕天使『レイナーレ』に突き刺さる。

（くっ、くくくくっ、あっははははははっ!!!　やっぱりオレは主人公なんだよ！　この世界はオレの為に廻っているんだ!!）

禍々しい形に変貌した赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）。彼の知る原作のこの時点での一誠以上の六回の倍加を最初から使って見せた。

倍化された力で片腕と片翼を消し飛ばされ這い蹲っているレイナーレが命乞いをしているが、優越感に浸っている一誠の耳には届いていない。自分の手にある力に笑みを浮かべながらも、表面では『最悪の初恋を経験した少年』を演じていた。

最後に思い出したように『お願いします、部長』と、レイナーレへのトドメをリアスに頼み、取り戻した神器とリアスの元にある悪魔の駒をアーシアへと与えた事で、彼女は悪魔として転生し、生き返ることができた。

（あとは龍騎の力を取り戻せば……）

そんな事を考えていたが当の本人は気付いていない。既に本来手にする筈の転生特典は四季に破壊、或いは奪取されていると言う事に。

（チッ、それにしてもレイナーレは結構惜しかったな、年増には興味ないけどロリの方も

結構可愛かったし）

……欲望全開なあたりはどうかと思うが、かなり見境のない転生一誠である。

ベルトさんと会合を終えた四季は、目の前で消えていくエイを模した仮面ライダー、『仮面ライダーライア』を一瞥し、彼の契約のカードを抜き取る。ライアの契約モンスター『エビルダイバー』もこれで入手したわけで有るが、

（……この世界の歴史が動くたびに、オレも新しい力を得る機会がある、か）

カードデッキを、ドラグナーの力を手に入れた時の話ではそう聞いた。先ほど倒したライアもその〝機会〟の一つだったのだろう。姿と力を模しただけの人形では有るが、紛い物に負けるほどドラグナーは弱くは無い。

（二人の護衛役にはなるか）

戦力としては三体で十分である以上、頼むべきは其方だろう。お蔭で自由に扱える戦

力がまた一つ増えた。ベルトさんも味方になってはくれたが、どんな細工がされているかは分からない以上、変身するのは避けた方が良いと言うのは四季とベルトさんの共通の認識である。

ep. 005

先日、ライアの偽者を倒しエビルダイバーを新たな契約モンスターとして契約した後、

『なるほど、そのカードは他人の武器をコピーできるのか』

「ああ、どうやら神器（セイクリッド・ギア）もコピーできるらしい」

この世界に対応した形に変化した《コピーベント》のカードの能力について、ベルトさんと検討していた。敵によって左右されるだろうが、それでも便利なカードと言えるだろう。

神器（セイクリッド・ギア）をコピーできると言っても飽く迄『形を持つ物のみ』と言う欠点が有る。

一誠の持つ赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）はコピー可能だが、木場の持つ魔剣創造（ソード・バース）は作り出した剣だけしかコピーできない。序でに禁手（バランス・ブレイク）も出来ない。

だが、赤龍帝の倍加の能力や作り出した魔剣の力まで完全に再現する事は可能だ。付け加えるならば、使い手を選ぶ武器でも自由に操れるという利点も有る。それを考えれば有効な武器だろう。

『うーむ、便利なカードだが使いどころは気をつけたほうがいいだろう』

「使い方によっては文字通り《切り札》になりうるカードだからな」
『使う所を見られない様に、と言うのも考えた方がいいだろう』
「ああ。今までは手持ちのカードは力押しのカードが多かったからな」
『確かに』
　パワーで戦うドラグレッダーとの契約で得たカードと、火力で遠距離から吹飛ばすマグナギガとの契約で得たカード。どちらも攻撃力に重点が置かれたパワータイプのカードだ。ダークウイングには分身を生み出す《トリックベント》のカードが有り、コピーベントと合せて大きく戦術が広がるだろう。
　……ゼール軍団との契約で得たカードもあるが、それはそれ。戦闘要員として考えていないので戦闘目的で呼び出したりはしていない。
『それにしても、このラボは素晴らしいな』
「まあ、元々は異星の天才科学者の研究施設らしいからな」
『ウムム、是非一度会ってみたいものだ』
　現在、ドライブピッドから破壊したバンノドライバー以外の品物を全て運び込んだ四季の基地と言える場所、通称『ユーブロンラボ』。
　海外版龍騎である『仮面ライダードラゴンナイト』に登場する仮面ライダーの生みの親である『ユーブロン』の研究施設を完全に再現されたものらしい。流石に科学知識も

なくカードデッキのシステムも整備の必要もない為に埃を被っていた場所だが、こうして十分に活かせる相手が仲間になってくれたのはありがたいだろう。なお、転生特典のおまけとして、ベルトさんのコレクションの車がいつの間にかユーブロンラボの地下二階に置かれていたりする。

ユーブロンとベルトさん、仮に出会ったとしたら間違いなく意気投合しそうな天才科学者達である。

……『混ぜるな危険』と言う注釈が着きそうだが、敵の立場としては。基本的に善人の天才科学者二人。

何時の間にか飛び出しているシフトカー達の中で残っているのが、変身用の物だけと言うのは、内心『良いのか？』とも思うが深く考えないようにしている。四季自身ドラグレッダー達には用が無い時はある程度自由に活動して貰っているのだし。

『情報収集はシフトカー達も協力してくれる』

「となると、ゼール達は詩乃達の護衛に廻って貰うか」

『見つかる危険が無いと言う点では彼らの方が優れてはいるが』

現実世界で活動するミニカーとミラーワールドから監視できるミラーモンスター。どちらが見つかりにくいかは後者の方だろう。……ミラーワールドを認識できるのは今のところ四季だけだ。

『ところで、君の言う〝オカルト研究部〟の様子を探っていたシフトカーからの連絡なんだが、彼女達が非公式のレーディングゲームを行なうらしい』

「非公式？」

ベルトさんの報告にそんな言葉を返す。少なくとも四季にとってレーディングゲームは興味が無い。自分達に対して影響がなければ気に留める必要もないだろう。だが、非公式と言う点は気になるが、練習試合でもするのだろうと軽く考えていた。

『彼女達の主であるリアス・グレモリーの婚約を賭けて行うらしい』

ベルトさんが言うにはリアス・グレモリーに居た婚約者である『ライザー・フェニックス』との結婚は元々彼女が大学を卒業した時に予定していたらしい。その予定は変わらないが、何故かこの時期に婚約を賭けたゲームを行なうと言う話だ。

『来月辺りに正式な婚約発表を行なうから、と言うのが受けた理由らしい』

「あー……」

恐らく魔王を排出したグレモリー家と強力な回復薬『フェニックスの涙』の販売で利益を挙げているフェニックス家との結びつきが強くなると言うのが面白くない反対派の貴族達に対する牽制も込めての早めの婚約発表なのだろう。

……反対派の貴族側は当のリアスが嫌がっている事を良い事に、善意と言う顔をしてリアスをバックアップする心算なのだろうが、婚約を推し進める側が先手を打って禄に

眷属の揃っていないこの時期に正式な婚約の発表を決定したのだろう。
「まあ、こっちには無関係、このまま無関心で通したいな」
『君がそれでいいのなら、私もこれまで通り監視だけに留めておくが』
「オレはレーディングゲームに興味ないからな」
付け加えるのなら、リアスにもその眷属達にもだ。
「それに、近い将来、悪魔側とは敵対する予定なんだ。下手に手の内を見せるのも不利になるだけだ」
『確かに一刻も早く動く必要が有るのだろうが……君の言う通り魔王まで出て来る可能性は』
「高い、だろ？」
『その通りだ』
ベルトさん自身四季の行動では確実に魔王も動いてくるだろうと考えている。そして、四季がその道を選ばないと言う選択を獲らないと言う事も。そもそも、そんな選択肢を取るのならば最初から詩乃にも刀奈にも関わってなどいない。
……純潔の悪魔とその眷属を殺した人間など、そこに如何なる理由があったとしても悪魔側としては放置しては置けないだろう。最終的に魔王にも『戦えば高くつく相手』と思わせるしかない。

「二枚のサバイブ……せめて『無限』のカードが有れば」
『……君はウロボロスにでもなる気なのかね？』
「いや、ドラゴンと蝙蝠に不死鳥を上乗せ」
　四季の言う無限とは《サバイブ『無限』》のカードの事を指している。龍騎世界最強のライダー『仮面ライダーオーディン』の持つ強化カードの一枚。龍騎とナイトの契約モンスターと契約しているドラグナーには既に烈火と疾風のカードが有るが、
『……無限の龍神ならぬ無限の不死鳥か。この世界の無限の龍神と何か繋がりでも有るのだろうか？』
「案外、ミラーワールドのウロボロスは不死鳥、ゴルドフェニックスだったりしてな」
　二人して『まさか』と言って笑い合う四季とベルトさんだった。四季も知る限りでは最強クラスのミラーモンスターなのだから、戦力として欲しているが流石に無限の龍神程の力は無いと考えている。
　……『仮面ライダーオーディン』としてその無限の不死鳥『ゴルドフェニックス』と契約していたのだから、ゴルドフェニックスが無限の龍神と同等の力が有るとすれば、事実上カードデッキはミラーモンスターであれば、無限の龍神級（クラス）の力を持つ存在（モノ）とも契約できる事になる。
　それは下手をすれば人間の作った道具が、聖書の神が作った神（セイクリッド・ギア）　器を超えていると

言う事にもなりかねない。……ミラーモンスター限定なので別に超えていても構わないが。

次点では『獣帝ジェノサイダー』であるが、其方は既にエビルダイバーと契約しているので、残るは頭と体を構成する二体のモンスターと契約が必要だ。

『私も君の力に慣れれば良いのだが……』

「まだオレがベルトさんの力を借りるには危険だからな……」

転生者の転生特典である以上、どんな仕掛けがされているか分からない。故に当面はドラグナーとして戦っていくしかない。

そんなベルトさんとの話し合いや研究を助手として手伝った翌日、教室の中に一誠とアーシアの姿がない事に気が付く。恐らくリアスの婚約を賭けたレーディングゲームの為の特訓に行ったのだろう。間違いなく他のクラスの木場や小猫、朱乃と言ったオカ研のメンバーも休んでいるのだろう。

（暫くは安心してはぐれ悪魔狩りが出来るな）

そんな彼らを見て暫く楽になると考えながら授業へと意識を向ける。……四季がそんな事を思ってから約十日……。

「……えっと、オレはどう言うリアクションを取れば良いんだ？」

「うん、言いたい事はわかるけど、家の前に倒れてて……」

心底困った様な表情を浮べる詩乃と頭痛を堪えている四季。二人の目の前には……ホスト風の男が倒れていた。

四季は目の前に居る男の事を知っている。『ライザー・フェニックス』、上級悪魔でフェニックス家の三男。〝元〟リアス・グレモリーの婚約者だ。

元と付くのにはレーディングゲームで負けたからである。禁手（バランス・ブレイク）へと至った一誠が十字架と聖水を武器に戦ったとか。片腕を禁手の対価としてドラゴンに変えた事でそれらに対する悪魔の持つ弱点を軽減させたらしい。

考えてみれば外見が変わらないのならば、ドラゴンの腕と言うのはメリットになる面もある。

……ゲームの内容は興味は無いが、何故かそんなライザーがボロボロになって倒れていた、道端に。しかも何故か四季の家の前。

見なかったことにしてドラグレッダーの餌にすれば後腐れも無いだろうが、流石に事情も聞かずに餌にするほど外道ではない。

「おーい、起きろー！」
そう呟きながらつま先で蹴飛ばすと、
《グゥ～》
誰かの腹がなった。思わず互いに顔を見合わせる四季と詩乃だが、
「た、頼む……何も食べてないんだ……」
続いて聞えてきた弱々しい声。本気で息倒れだったらしい、この上級悪魔。

「で、一体何が有ったんだ？　悪魔の貴族だろ、あんた？」
「うっうっ、実は……」
食事を与えて事情を聞いたところ……（悪魔の事は知っていると説明済み）、泣きながら何故こうなったかと語りだすライザー。
何でもレーディングゲームに負けた後、大切な眷属を全員一誠に寝取られて（表向きは妹の眷属へのトレード）ライザーはフェニックス家を追放されたらしい。今では彼の元眷属は一誠の家に住んでいるとか。
自棄になってこの町にいる一誠に再戦を挑むもあっさりと返り討ちに合い、何もかも失いボロボロになって丸一日彷徨っていた結果、行き倒れになっていたそうだ。

「苦労したんだな、一日に其処まで落ちぶれるなんて……」
「分かってくれるのか!?」
　思わず身の上に同情すると感極まって泣き出すライザー。四季はそんなライザーに苦笑いを浮かべつつ詩乃に視線を向けると、可哀想だから助けて上げてと言う視線が返って来る。
（……実戦経験が有る上級悪魔、それもフェニックスに赤龍帝とは言えなりたての転生悪魔が勝った？　しかも、二度も？）
　改めてライザーからその話を聞くと疑問に思う。仲間の存在や戦術も考えるならば勝機は有るかとも考えていたが、どうもこれまで調べた一誠の悪魔への転生の経緯と合せて考えるには違和感がある。一度目は相手の弱点と己のドラゴンの腕と言う利点を利用した結果なのだろうが、問題は二度目の勝利だ。
（純粋に実力だけで勝った？　有り得ない、経験値が違いすぎる、才能と言い切るには短すぎる）
　十日程度の特訓で強くなれれば苦労はしない、ゲームではないのだから。敵を倒してレベルアップ等と言う便利なシステムは無い。初級から中級程度の堕天使に殺されて転生悪魔になってから、一月も経たずに上級悪魔に一騎打ちで勝つなど有り得る話ではない。

例え天才と言えどその才能を開花させるには短すぎる。一度目の勝利は己の腕を犠牲にした禁手と、ドラゴンの腕の利点と悪魔の弱点を突いた戦術……格上の相手に対して身を削っての必死の努力の痕が見える。二度目の戦いとは明らかに違う。

（……別人みたいだな）

まるで、一度目の戦いは力の足りない別の赤龍帝が格上のライザーに勝つ為に必死に模索して努力したとしか思えない。

「……どう思う？」

「別の人が同じ力を持ってて、同じ相手と戦う為に考えたとしか思えないわね」

詩乃の同意を受けて考えすぎでは無いと認識する。出来れば刀奈の意見も聞きたいところだが、現在彼女は此処には居ない。

（あの変態、警戒する必要が有りそうだな）

ライザーの話を聞いているとそう思えてくる。明らかに実力を隠して強力な神器を持っているだけの一般人と言う演技をしている正体不明の相手。警戒するには十分過ぎる肩書きだ。

「それで、あんたはどうするんだ？」

流石に何時までも此処に置いておくわけには行かない。一応、将来の仮想敵の所属なので。そう考えながらライザーに問いかけるが。

「ああ、それなら」
　ライザーが言うには隣町には眷属にも秘密にして購入した彼名義の人間界用の別荘があるそうだ。そこには財産も蓄えているので暫くは暮らせるらしい。
　隣町までの交通費と駅までの地図を渡すと、食事と交通費の礼だと言って『フェニックスの涙』を一瓶渡されたのだった。
「詩乃、念の為学校じゃ……」
「分かってるわ、オカ研のメンバーには絶対に関わらない様に、でしょ？」
「頼む」
　明らかに怪しい赤龍帝とその仲間であるオカ研。本格的にオカ研との接触は避けるべきだろうと判断した。
（戦力はまだ不安は有るけど、そろそろ本格的に動くか……）

ep. 006

「……頼まれていたものはこれで全部だよな?」

ライザーを助けた時から数日が経ったある日……詩乃に頼まれて切らしていた調味料を買いに出かけた四季は、メモを片手に買い物袋の中身を思い浮かべる。調味料以外にも色々と買い物が有ったらしく、二人に頼まれた物はそれなりの量になってしまった。

「ギガゼール」

鏡の中からギガゼールを呼び出すと買い物袋を家に持ち帰るように頼む。

シフトカー達のお蔭で最近ではゼール軍団も交代で食事を取らせる事が出来るようになった。本日四季が連れているのはドラグレッダーと先ほどのギガゼールに、エビルダイバーと先日新たに契約した六体目のモンスターだ。ダークウイングとマグナギガは自宅の警備中となっている。

ベルトさんは現在、本人を初めとする四つの変身用のベルトと二台のトライドロンに妙な仕掛けが無いか調べている最中だ。何れは四季が安心して変身できる様にしたいと言っていた。

（さて、夕食に遅れないように急いで帰るか）
足りない調味料はギガゼールに届けさせたので四季が家に着く頃には夕食は出来ているだろう。遅れると二人に怒られそうなので急いで帰ろうと考えると、
「っ!?」
鼻を突く嫌な匂い。……こんな物に敏感になった事など嘆きたくもなるが、その辺は考えないことにする。……それは、間違いなく血の匂いだ。
「変身!」
近くにあった鏡面にカードデッキを掲げ、腰に出現したＶバックルに走りながらカードデッキを装填すると四季の姿はドラグナーへと変わる。
（ここか?）
路地裏に飛び込むとドラグバイザーに新たにソードベントのカードを装填する。路地裏から感じられる敵意……殺意とでも言える気配に警戒しながら視線を向けると、
「っ!?」
血まみれになって倒れる神父らしき男性の姿があった。周囲にあるのは戦闘痕、恐らく何者かと戦闘が有って敗北したのが神父だと推測できるが。
「手遅れだったか?」
既に息が無い事を確認すると腕のドラグバイザーをスライドさせ、

《ソードベント》

手の中に出現するドラグセイバーを後ろに向かって振るう。

「ちょいさー!!!」

奇妙な掛け声と共に振り下ろされた剣とドラグナーのドラグセイバーがぶつかり合う。

「ふっ!」

「ぐほっ!」

相手が動くよりも先に空いた手で相手を殴り飛ばす。転生悪魔だろうが純粋な力比べならば、ドラグナーの方に圧倒的に部がある。先ほど殴った感覚から、人間で有る事は間違いないだろう。服装は教会の人間の物……持っている剣は感じ取れる聖のオーラから恐らく聖剣だろう。

(だったら……)

《コピーベント》

　ドラグナーの目の前に目の前の白髪の神父らしき相手が持っていた剣が現れると、それを引き抜く。
「って、うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?　なんで、お兄さんの手にエクスカリバーちゃんがあるんでしょうか!?」
「エクスカリバー?」
　自分の持っている聖剣と見比べながら驚いている神父を他所に先ほど相手の言った言葉を呟く。
　円卓の騎士の物語だけでなく日本に於いても様々なゲーム等で有名で最も知名度の高いであろう聖剣の名前が飛び出したことに思わず唖然としてしまうが、直ぐに気を取り直してコピーしたエクスカリバーを構える。
「だけど、このエクスカリバーちゃんを使えるのは、オレだけなんだよ!」
　目の前の神父が高速で襲い掛かってくるが、その動きでドラグナーは自分の持つ聖剣の特性を理解する。
「ふっ!」
「おわっ!」
　同様のスピードで動き出したドラグナーの斬撃を奇妙な動きで避けながら神父は驚きを露にする様子を見せる。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待て！　なんで同じ聖剣が二本になってそっちも使いこなせてるんだよ!?」
「教える必要は、ない！」
一言で言えばコピーベントのカードの効果なのだが、それを知らない相手にとっては驚愕の一言に尽きる。恐らくは希少な武器だと言う事は相手の反応からよく分かる。それが行き成り相手の手にも現れたのだから、驚くのも無理は無い。
仮に扱うのに必要な要因が有ったとしても問題なく使用でき、その武器の力を十二分に能力を発揮できるのがコピーベントのカードの力だ。とは言え、恒久的ではなく破壊されれば消えるし、その武器を持っている相手が一定距離から居なくなれば消える。要するに戦闘続行不可になれば勝手に消える。
そして、一つ付け加えるならば、態々同じ速度で高速の切り合いをしているほど暇では無いのだ。

《コンファインベント》

ライザーを助けた後、新たに契約したモンスター『メタルゲラス』との契約で得たカード『コンファインベント』のカードの力は、

「へっ？」
　マヌケな声を上げて神父の速度が落ちていく。同時に相手の持っていた剣のオーラさえも失った。
「うっそぉおおおおおおおおお!!!!　エクスカリバーちゃんがただの剣になっちゃってるぅー!?」
　残念ながらカードの効果で召喚した武器では無いので存在を消し去る事は無く、その武器の持っている力が一時的に消えるだけだが、それでも強度以外はただの剣に成り下がってしまった。しかも、持ち手に何かしらの制約がある場合はそれまで残るのだから、ただの剣以下だろう。
「武器の差はこっちが勝ったようだな、終わりだ！」
「って、えぇぇぇぇぇぇ！　オレって超ピンチ！　てな訳で、バイちゃ！」
　トドメを刺そうとした瞬間、神父が懐から取り出した何かを地面に投げつけると、凄まじい先行と共に視界が奪われる。閃光弾だったのだろう、光が消えた後には神父の姿はなかった。
「……そう遠くには行ってないか」
　手の中に有るコピーしたエクスカリバー（仮）はまだ消えてないことから、そう遠くにはいってないだろう。追撃するのも面倒だと思って帰ろうとした瞬間、

『エクスカリバー!!!』

再び新たな襲撃者が現れた。新たに表れた襲撃者……木場は憎悪に染まった視線でドラグナーでは無く、彼の手にあるエクスカリバーへと向けている。

「今日は厄日か?」

「それを渡せっ!　死にたくなければエクスカリバーを渡「ほれ」え?」

突然彼の求めていた聖剣をゴミでも投げ捨てるように、缶ジュースでも投げ渡すように放り投げたドラグナーの行動に疑問に思うが、直ぐにドラグナーが投げ捨てた聖剣へと手を伸ばすが、

「なっ!?」

木場が手を伸ばした瞬間、タイミング良く聖剣が消える。オリジナルを持っていたフリードが戦闘圏外まで逃げたから消えたのだろうが、そんな事を知らない木場は憎しみの目をドラグナーへと向けるが、

《ファイナルベント》

……どうも、本気でイライラしているらしいドラグナーがファイナルベントのカードを発動させる。後ろに出現するサイ型モンスター《メタルゲラス》、ドラグナーの手にはメタルゲラスの頭を模した武器『メタルホーン』を装備している。
「ふっ！」
メタルゲラスの突進と共にメタルゲラスの頭に着地するように後ろに飛ぶ。同時にメタルゲラスの突進力によって射出されたドラグナーがメタルホーンを前方に構えながら木場へと向かう。
「っ!?　うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
メタルゲラスのファイナルベント『ヘビープレッシャー』の直撃に対して咄嗟に大型の魔剣を大量に作り出して盾にする。純粋に強度のみを追求して作り出した魔剣の群を砕きながら、ヘビープレッシャーは木場へと直撃する。
「が……ガハッ！」
「そんなに殺気だって殺すなんて宣言したんだ……お前が殺されたって、満足だろう?」
魔剣も威力を軽減させる盾にはなったのだろう、辛うじて生きていた木場が血を吐きながら顔を上げる。そんな木場へとドラグナーは仮面の奥から冷たい眼を向ける。
ゆっくりと手を上げたドラグナーの後方からドラグレッダーとメタルゲラス、エビルダイバーが現れる。

「さあ、ディナーだ。仲良く食べろよ、お前達」
完全にドラグナーが悪役の構図だが、現在進行形で頭にきている。向こうから殺すなどと言ってきたのだ、此処で後腐れなくモンスターの餌にでもしてしまった方が、今後も悩まされずに済むだろう。
ドラグナーの許可によって三体のモンスター達が一斉に倒れている木場へと襲い掛かる。
「待ってください」
「……またか」
流石に三度目ともなるといい加減嫌になってくる。ドラグナーの従える三体のミラーモンスターの前に立つ少女……『搭城　小猫』の姿に思わず溜息を吐く。
（変な似非神父を撃退したらグレモリー眷族の騎士が出てきて、今度はそのお仲間か）
冗談抜きで後腐れなく二人纏めてミラーモンスターの餌にしてやろうかとも思ったが、一応は会話をしておく事にする。
「悪いが待つ理由は無いな」
『え？　良いの？』と言う疑わしげな視線を向けてくる三体に対して思う所は有るが……あまり変に躊躇した所が相手に知られても面倒だし。まあ、流石に此処で話も聞かずにそうするのは流石に戸惑われる。

「木場先輩の事は私が謝ります、だから」
「はぁ、分かった。そいつの命、今は君に預けておいてやる、……但し、次に敵対したら、その時は……分かっているな？」
「はい、分かっています」
冷たい口調で告げられるドラグナーの言葉。敵対したら本気でドラグレッダー達の餌にする心算だが、向こうもその意思は理解したのだろう。小柄な体でズルズルと木場を引き摺って立去っていく、結構シュールな絵だ。
「……まったく、また何か有るって事か……」
聖剣から考えると堕天使の次は天使か、とも思うが先ほど殺されていたのは同じ神父で有る事を考えると、片方……聖剣を持っていた方がはぐれエクソシストと推測できる。そうなると……
「堕天使、そこそこ上級の奴か。丁度良い……そろそろ本格的に魔王相手に喧嘩する事も考えなきゃならなくなったと思ってた所だ。前哨戦程度にはなって貰おうか」
戦力（手札のカード）は揃っていないが、今の段階でその程度の相手に勝てなければ、ドラグナーの……四季の考えている戦いを生きぬく事は出来ないだろう。そう考えると、魔王の妹の居るこの場所に襲撃を仕掛けてきた上位の堕天使は丁度良い前哨戦の相手となるだろう。最悪の場合の切り札もある。

そう考えながらドラグナーは鏡の中に消えて行った。

……なお、帰った後詩乃さんと刀奈さんに遅くなった事を怒られたことを追記しておく。

ｅｐ．００７

「……っと言う訳で、今現在この町は擬似的な三大勢力の戦争が再現されているから、くれぐれも気をつけてくれ」

『悪魔』側の領地で、『堕天使』が聖剣を奪い、その奪還のために『天使』の勢力から戦力を派遣されている。と言う訳だ。

正座させられながら詳しい事情を説明している四季に頭を抱えている詩乃と刀奈の２人。そして、

『ふむ、だが君は寧ろ好都合だと思っているのでは無いか？』

「分かったか、ベルトさん」

「好都合って、どう言うことなのよ？」

四季の心情を読んだかの様に応えるベルトさん。そんな２人の会話に疑問を浮べる詩乃。

「今この町は三大勢力が小規模ながら入り混じっている、擬似的なかつての戦争と同じ状態。そんな状況だからな、今更聖剣が一本紛失しても分からないだろ？」

まあ、三大勢力は紛失した聖剣を探すだろうが、盗んだ聖剣は暫くの間ミラーワール

ドにでも隠しておけば先ず見つからないだろう。
今のところミラーワールドの存在を認識しているのは四季側の勢力だけであり、ミラーワールドの中に入れるのは四季とミラーモンスター達だけなのだから。
「それに、オレが扱う分には聖剣の因子も費用ないだろ？」
「そう言う事ね」
「今更だけど、本当に反則よね」
要はコピーベントでのコピー元にし続ける為に聖剣を確保するだけだ。対悪魔様の武器には丁度いいだろう。聖剣を扱う為に命を賭した者達にとっては、四季のコピーベントの力は『反則だ！』と叫びたい気分だろうが、そんな事は知った事じゃない。
刀奈の家族を助けるためにも対悪魔用の戦力確保としては少しでも多く手に入れておきたい。
「治療薬は揃えられても武器の補給はこう言う時にしておきたいからな」
四季の用意している治療薬はライザーから購入したフェニックスの涙だ。
……現在、ライザーは細々と簡易型のフェニックスの涙を売って細々と生計を立てているらしい。四季も前にサンプルとして幾つか分けてもらった。今では最大のお得意様である。
「まあ、刀奈姉さんの事も有るから、なるべく早く動きたいからな。今回の一件は武器の

確保が出来る」

……四季と刀奈が出会う前、彼女の家がとある悪魔の貴族に襲われた。転生者らしい悪魔による眷属狩り……何度か潰しているが、転生者らしい悪魔が眷属への転生用として捕えた人間の人身売買を行なっていると言う事も行われている。

貴族の協力がなければ悪魔の社会は成立たないと言うのならば、一度本気で崩壊してしまえ、としか言えない四季である。

強力な神器を宿した者、才能がある者、純粋に外見で選ばれるもの、等々理由は有るがそれで大きな利益を得ていた悪魔も多く居る。……目に付く限り潰してしっかりと即金に出来そうな金銀宝石は確保していたが……。特に中核メンバーは悪魔側に生まれた転生者達に当たる。

日本のそんな中で裏に属していた更識家が標的とされて襲われたそうだ。人間とは言え影響のある一族を襲撃するのは相応の地位と力が有る悪魔であり、下手に倒しては間違いなく魔王も動くだろう。彼女の妹や従者の姉妹は人身売買のオークションに出されたと言う情報は無いため、助ける為にはその悪魔の首を取る必要が有る。

今回の一件ではその為の武器が手に入るかもしれない。最悪は聖のオーラを持った武器として鋳潰してベルトさん担当の新しい武器の材料にしてしまえばいい。

……ベルトさんと強制的に聖剣を誰にでも扱えるように矯正する方法を模索し

てもいい。此処に四季とヘルトさんによる『聖剣改造計画』通称『聖剣計画』の発動が可決されてしまった。

「纏めて鋳潰せばハンドル剣の刀身が聖のオーラ纏うかな？」

『いや、砕いて核として利用すれば良いのでは無いか？　必要な因子を科学的に解明できれば良いのだが……。そうすればハンドル剣の核にして理論上初代の使用者以上の因子を作り出して……』

「なるほど、擬似因子を科学的に発生させて聖剣から強制的に……」

『ああ。だが、君の負担を考えると最大の出力は一瞬だけ……』

「必殺技って所だな」

哀れエクスカリバー……上手く生き延びなければ誰も聖剣とは思われないハンドル剣に改名される未来が待っている。一歩、また一歩とエクスカリバーが地上から生滅する日が近付いていた。

やったね、木場君。エクスカリバーが消えるよ。

最悪、聖のオーラが残らなくても材料費が浮くと考えれば損は無いだろう。等と考えている辺り、聖剣に対して単なる道具と切り捨てている。『約束された安全運転の剣（エクス・ハンドル）』完成まであと少し。

「名前は……聖ハンドル剣か、ハンドル聖剣とかか？　ネーミング的に」

『……いや、それは無いだろう』
「じゃあ、エクス・レーサーブレードとか？」
……奪われたエクスカリバー、こいつ等に先に奪われると間違いなく改造される運命にあるよ。

一方、四季達がエクスカリバーを材料に新型のハンドル剣の開発計画を進めていたころ、転生者一誠はと言うと。
（よっしゃー、大・成・功!!）
一誠、木場の二人で教会から派遣された二人の聖剣使い『紫藤　イリナ』と『ゼノヴィア』の二人相手に『ドレスブレイク』を決めていたりする。なお、それに巻き込まれてアーシアと小猫の二人も剥かれていたが。
……この転生者、原作一誠と同様に必死にこの技を学んでいたそうな。ただ、元々の魔力スペックが一誠よりも高いらしく一定範囲の女性の衣服を連鎖的に破壊する技になった様子である。幸か不幸かリアスと朱乃は技の効果の範囲外に居たらしい。
正に脱衣ＭＡＰ兵器。……それに怒った小猫の一撃に倒れた瞬間、鉄バット状に変形

したイリナの『擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）』に殴られ、更にはグラウンドに落ちていた野球部の使っていたであろうバットを持ったゼノヴィアも参加しての袋叩きが始まった。

流石にそれで逆に冷めたであろう木場はその場から立ち去って行き、一誠をボコボコにした三人は小猫に案内されて更衣室に、最後に残された一誠は彼を心配したリアス、アーシア、朱乃の三人に介抱されていたが。

（ふっ……ふふふふ……。イリナも小猫ちゃんも、ゼノヴィアも照れ方が過激だな。特にイリナは小さい頃からの積み重ねと、ドレスブレイク会得で一緒に使えるようになった特典の、魅了の視線の力でメロメロになった筈だろうし……）

《魅了の視線》。一誠に憑依した転生者のドライブのシステム一式に続く、彼の望んだ得点であり、一定の時間以上視線を向け続ける事で自分に対する好意を植え付ける効果がある魔眼の一種。この能力は一定以上の魔力耐性がある物には無力であるが、元々好意が有れば効果があるらしい。

好意が無く魔力耐性が高い者にはその視線に対して強い嫌悪感を持つ。

「本当に気持ち悪いです」

「そうなのよ！　イッセー君てば、昔はよく一緒に遊んだけど、時々変な目で私のこと見てきたけど……今のはなんか、気持ち悪い」
「確かに、本気で言葉に出来ない嫌な物を感じたな、彼の視線には」
　代わりの服に着替えながら一誠に対する嫌悪感で話が盛り上がったり、仲良くなったりしている小猫とゼノヴィア。相手が悪魔と言う事で多少複雑な様子のイリナとも歩み寄ったりしている。
　それでも、三人の仲は割りと良くなった様子だ。
「……ところで、一日だけでも彼の家に泊めてもらうという話はどうする？」
「ごめん、ゼノヴィア、あれ無しで！　うううっ……悪魔とか人間とか関係なしに、あんな風になるなんて……同じ家に泊まったら……」
「ああ、私もなんと言うか……身の危険を感じた」
「それがいいと思います」
　一応、宿が決まるまで一誠の家に一日くらい泊めてもらおうかと思っていたイリナだったが、本気で自分とゼノヴィアの貞操の危機を考えて嫌がっている。悪魔とか人間とか抜きにしても、襲われる危険のある相手と同じ家には居たくないだろう。

転生者一誠の元を逃げるように去って行ったエクソシスト二人。そんな事があっと知らない四季は……

「……どうしてこうなった?」

服は着ているし乱れても居ない……左右には首に手を廻してしがみ付いている詩乃さんと、四季の腕をホールドしている刀奈。……時々布団にもぐりこんでくる二人の事は既に受容れているが、今回は更に二人増えていたりする。黒いショートカットの美少女二人が……。

以前、人身売買のオークションを行なっている悪魔の貴族の元から助けれた二人で、家族を殺された少女と、家族から虐待を受けていた少女……。どちらも帰る場所が無い、と言う意味で四季の用意した家に住んでいたが、危険が増したので避難して貰ったが……。

「なんでこの状況?」

スッカリ、ハーレム状態の四季であった。

ｅｐ．００８

「おー、イッセー、新しい特典が目覚めたんだってな？」
「おー、そうなんだよ。最近やっとイリナとゼノヴィアが駒王町に来てな、これでオレのハーレムももっと豪華になるぜ」
「へへへ……まあ、お前のお蔭で良い物手に入ったからホント感謝してるぜ」
ソファーに座りながら飲み物を勧められつつ一誠の友人の転生者との会話を交わす。
気安い友人同士の会話に聞えるが、周囲の雰囲気が明らかに普通では無い。……窓一つ無い部屋に矢鱈と明かりが強いライトでテーブルとソファーを照らした部屋……極めつけは虚ろな目をした肌も露な格好をした少女達がホステスの様な事をしている時点でまともな場所ではない。
「そいつは売らないで残してるのか？」
「ああ、『ミッテルト』だけしか手に入んなかったからな、カワラーナとレイナーレは殺されちゃっただろ？　お前は上手くやったよな……焼き鳥の眷属根こそぎ手に入れたんだって」
「おう。しかも、レイヴィルも手に入ったし、そのお蔭でフェニックスの涙をこっちに大

量に卸せるだろ？」
「ああ、お前のお蔭で商品を長持ちさせる事ができるぜ」
他の少女達と同じ格好で鎖付きの首輪をつけた虚ろ目な黒い翼を持った堕天使の少女『ミッテルト』を侍らせながら、男は楽しそうにケラケラと笑っている。
此処は、貴族悪魔に転生した転生者が中心となって複数の転生者の同時経営で運営されている転生者のみしか入店出来ない会員制の店である。四季が襲撃を狙っている場所とは違うが、危険性は此方が圧倒的に上位に位置している。
人間、堕天使、悪魔と様々な種族の少女達が捕えられては、自我を消され様々な形で〝商品〟として扱われている店だ。
白熱した即席のオークションや、正気の少女達を拷問するショーを行なっている時点でマトモな神経をしている者はいないのだろう。
「今度は手に入れ損ねるなよ、親友」
「分かってるよ。そっちこそ連絡忘れんなよ、原作の動きって奴はお前が一番分かり易いんだからな」
『乾杯』とグラスをぶつけ合って笑う二人の男。転生者と言う存在が生み出した闇の中で、力を持つ者達は愉快にこの世の春を謳歌していた。
「その内、惚れ薬とか用意してやるから、グレイフィアとか、セラフォルーとか、原作の

強キャラゲットしたらオレにも貸してくれよ」
『立場上、中々手に入らないからな』等と言っている男に同意する一誠。この店の経営に参加している貴族悪魔に転生した転生者と、一誠に転生した転生者は楽しげに笑う。
「まっ、お前がハーレム作れるようになるべく早く上級悪魔になれる様に協力するから、期待しててくれよ」
「おっ、何か考えてるのか？」
「ああ、上層部の連中の始末と、三人の魔王の地位を奪うんだ」
そう言って邪悪に笑う悪魔の男。勧めている上層部の抹殺計画を笑い話のように一誠へと話していた。
「サーゼクス達は悪魔の駒の問題点とか持ち出して、あとは力技で、な」
「最悪でも、オレは部長達を止めておけば……」
「ああ、セラフォルーはお前が落としてくれれば、こっちの味方だ」
転生者の間で計画されている悪魔側の上層部ののっとり計画。セラフォルーと魔王や上層部の女性の眷属を自分達の戦力に組み込むと言う計画を進めている様子だが、上手く行くかは疑問である。
なお、この時、グレイフィアとセラフォルーの二人は身の危険を感じたと言う。

四季　ＳＩＤＥ

（……ど、どうする……この状況？）

「ん……？」

四季がそんな事を考えていると一人が目を覚ます。

「ふわぁ……。おはよう、四季お兄さん」

「ああ、おはよう……〝雫〟」

『北山　雫』。四季が潰した悪魔側の人身売買のオークションの商品として誘拐された被害者の一人。魔法使いの家系であり、転生者らしき悪魔に家族を殺された側の人間でもある。

……その貴族悪魔については既に四季によって始末されているので彼女が再び狙われる可能性は低いだろうが、念の為にと警戒して貴族で上級悪魔が二人も居る駒王学園とは別の学校に通っている。

「……で、なんでこんな状況に？」

「みんなで愛情表現？」

「愛情って」
　そう言って首をかしげる姿は可愛らしいものがあるのだが、流石にこの状況は色々と拙いものがある。
　なんとか抜け出そうとするが、
「うふふふ、逃がさないわよ」
「ちょっ、刀奈姉!?」
　『ガシッ』と言う擬音でもつきそうな勢いで刀奈に抱きとめられる。
「私達と一緒に練るのはイヤ？」
　逃がさないとばかりに四季の服を捕まえつつ上目遣いで問いかけてくる雫。其処でイヤだと応えたら確実に同性愛者だろう。四季は普通に女の子が好きである。
「そうね、最後まで責任はとってもらうわ」
　更に何とかその状況から抜け出そうとする四季に向かって問いかける少女……詩乃が更に強く四季の腕を抱きとめる。
「お、おい……」
「まだ気持ちよく寝てる子も居るんだから、起しちゃ可哀想よ」
「グゥ……それは分かってるけど」
「なら、もう少しこうしててもいいわよね」

ふと、近くに居るシフトカーと視線が合うが、『ごゆっくり』と言う様子で走り去っていった。……ベルトさんにも見捨てられたのだろう。

「……ベルトさん、見てたなら助けてくれれば良いのに……」

『ハハハ、それはすまなかった。彼女達が幸せそうだったのでね』

朝食の用意が出来るまでの間、現ベルトさんの研究施設である、ユーブロン印の研究施設で四季はベルトさんにジト目を向けている。さんな四季に苦笑しながら、本題へと映る。

「それで、これは安全性が確認できたわけか」

『正確に言えば一から作り直したと言うべきかな?』

そう言って手に取るのはベルトさんの前に置かれた『マッハドライバー炎』。元々転生者の特典として作られたものなので、変な機能でもないかと警戒していたが、どうら間違いなく安全らしい。

『それに、念の為に一から製作しておいた。これなら、君も問題なく変身できるだろう』

「助かる」

これでドラグナーの姿を隠して仮面ライダーとして戦えるわけだ。どうもドラグ

ナーの姿でリアス達の前に現れている以上、目の前でドラグナーに変身すれば厄介な事になる。
「じゃ、試してみるか」
『ああ、何時でもいいぞ』
「変身！」
　フィンガースナップと同時に四季の手に飛び込むシグナルバイク、そしてそれをベルトへと装填し、彼の姿を白い仮面ライダー、『仮面ライダーマッハ』へと姿を変える。
「なるほど、悪くないな」
『ああ、それならドラグナーに変身せずに戦えるだろう？』

ep. 009

「追跡、撲滅、何れもマッハ……って、これやら無きゃダメなのか？」
『まあ、無理にやる必要は無いだろうが、君の情報を隠すという意味では効果的なのではないのかな？』
　ポーズと決め台詞の練習をしつつベルトさんに聞く。四季の動きもぎこちないし、台詞も棒読みである。
「……目の前で変身したら意味無いんじゃ？」
『だが、ドラグナーと同一人物の可能性は相手も考えないのでは無いのかな？』
「それも……そうなのか？　兎も角……そう言う事なら」
　軽く呼吸をして仮面ライダーマッハの姿の四季は意を決して、
「追跡！　撲滅！　何れも、マッハ！　仮面ライダー……マッハ！」
　かなりノリノリでポーズと台詞を、
「四季、ご飯できたわよ」
「早くしないと食べちゃうわよ」
　タイミングよく詩乃と刀奈が二人揃って入って来る。……目の前で追跡、撲滅と決め

台詞とポーズを決めている真っ最中に。
「あっ……ああ……」
　流石に普段からライダーに変身しても決め台詞は叫ばない四季としては、そんな姿を知り合いに見られるのは……本当に恥かしいものがある。震えながら物凄く恥かしい思いをして項垂れる四季。
「えっと……か、格好良かったわよ、四季」
「そ、そうそう、ヒーローらしくて、お姉さん良いと思うわよ」
「な、慰めないでくれー！」
　二人からフォローされてマッハからの変身解除と共に絶叫する四季。流石にこの状況でこんな風にフォローされると物凄く恥かしいものがある。
『フム、次はチェイサー用のシグナルバイクを用意しておいた方が良いだろうか？』
「……寧ろ、決め台詞ない分そっちを先にしてくれ……」
『一応、人間用では無いからね』
　どうやって人間用じゃない変身アイテムを転生者に使わせる心算だったのか、人事ながら気になる四季だった。
『と、兎も角、突然の襲撃にもこれで対応出来る様になるね』
「そうだな」

「じゃあ、もう一度やってくれない？　今度はちゃんと録画しておくわよ」
「ちょっと待って、カメラ持ってくるから」
「すみません、刀奈姉さん、詩乃さん、保存しないでくれ!!!」
慌てて二人を止めようとする四季だが、そんな四季を他所に刀奈は何かを思い出す。
「それは良いんだけど、この町に天界の勢力がいるのよね？」
「ああ、聖剣使いが……「あの子が暴走するんじゃない？」あっ！」
刀奈の言葉に思わず叫んでしまう。……此処に居る四人以外にもう一人……問題ある人間がいた。隣町に居るので油断していたが……。
「ま、まあ、隣町に居るから問題は……」
「無いって言い切れないと思うけど」
「そうよね。しかも……しっかり連絡してるんでしょ、四季の事だから」
「いや、確かに連絡はしたけど……危険だからこっちに来るなとも言ったし、直接面と向かって会わない限り、暴走もしないだろ」
「この状況で来るなって言われて知らない顔していられるタイプと思う？」
「……思わないな」
そう言ってスマホを取りだしてコールしてみるが、見事に繋がらない。時間的には十分に繋がる時間帯だ。

「チッ！　ベルトさん、最悪実戦で運用データの収集になりそうだ。バイク借りる！」
そう言って四季はドラグナーのデッキとマッハドライバー炎を持って研究所を飛び出して行く。
「四季の分の朝御飯残して……これって？」
走り去っていく四季にそう言っていた詩乃がテーブルの上に置いてあるカードデッキの存在に気付く。ドラグナーの物と違いライダーを示すエンブレムが描かれていないブランクのデッキだ。
『ああ、それは四季が置いていった予備のカードデッキだ。少々興味が有ったので、調べさせて貰うように頼んだら、研究用に幾つか貸してくれた』
同様に二つのカードデッキが研究室の中には置かれていた。モンスターとの契約のカードが抜かれているので、それらは四季の手元に有ると言う事だろう。そのカードデッキは未契約（ブランク）の状態で置かれていた。
「ふーん、それじゃあ、これが有れば私達も変身できるって訳ね？」
『ああ、そのシステムは汎用性が高い。誰が変身しても問題なく使用できるが、契約したモンスターと変身者個人の能力が直接反映されるが……』
刀奈の問いかけにベルトさんはそう答える。ドライブのシステムとは違うシステムに対して本当に興味が有ったのだろう。興味深そうに予備のカードデッキを見ている

詩乃と刀奈の二人を微笑ましそうに見ながら、ベルトさんはトライドロンの調査に映る。

（必要な時が来なければ良いが、ドラグナーに変身できない時も来る危険もある。その時のために、彼のための力は必要だ）

何時までも力を隠していられない以上、ドラグナー＝四季と気付かれない方が良いだろうと言う配慮だ。

……どうもドラグナーとしてこの町で活動していた結果、妙に多くの相手に目を付けられているのだ。科学１００パーセントのドライブのシステムならば、ある程度は誤魔化せるだろう。

（やれやれ、私自身にどんな細工がされているか分からない以上、慎重になる必要が有るな）

だからこそ、意思の無いベルトであるマッハドライバー炎の方の政策を優先したのだ。ベルトさんとしても、調査を兼ねての一からの製作ではそれ相応の時間が掛かるのだが、それを短時間で行なえたのはユーブロンラボの設備のお蔭だ。

（科学技術は私の知っているものよりも何倍も先に進んでいる。このラボの持ち主には本当に感謝しなければ）

カードデッキの技術を簡単に確認しただけでも、何重にも施された悪用防止や変身者

の生命保護の為の安全装置がよく分かる。幾つかはベルトさん自身も是非参考にしておきたいレベルだ。

「ねえ、ベルトさん、お願いがあるんだけど」

「そうね、私からもお願いがあるんだけど」

『ん？　何かな、二人とも？』

そんなベルトさんに問いかける詩乃と刀奈。二人の手の中にはカードデッキがある。

（よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあー）

届けられた小包を開けながら心の仲で一誠は絶叫していた。同じ転生者の友人から送られてきた小包……カモフラージュのためか、彼の好みそうな本が入ったダンボール箱の奥にある本命の品を二つポケットの中へと入れる。

カモフラージュとして入っている品がメイドやら魔法少女やらなのは………それを貰った時の約束が影響していたりする。

一つは小瓶に入った惚れ薬
もう一つは『擬似ライダー・オルタナティブ』

それのカードデッキである。……ドラグナーのデータから技術関連の転生者たちの技術で作られた品だが、ユーブロンの頭脳は無かったのだろう、契約モンスターまでは作り出せず別ベクトルでの研究の末に開発された……モンスターとの契約無しで力を発揮できる『最強のブランク体』として生み出された品。

モンスターとの契約をしない事を前提に設計された結果、携帯性の高い純粋なパワードスーツとして完成させたものの、ミラーワールドへの突入能力は無い不完全な代物なってしまったが、戦闘能力だけは折り紙つきだ。

一誠に届けられた『オルタナティブ・クリムゾン』と名付けられたそれは彼の禁手の鎧とオルタナティブが混ざった赤い姿へと変身できる。

一誠の神器（セイクリッド・ギア）・赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）と合わせれば、相応の力を発揮してくれる事だろう。

上手く行けば、オリジナルの仮面ライダーにも勝てる。

（コイツがあれば、あいつが奪ったオレの特典を奪い返せるぜ!!）

ドラグナーと勘違いしているが、一応ドライブのシステムは四季が強奪したので、あながち間違いではなかったりする。

（ぐへへへ……コカビエル戦の前にはまたイリナのフラグチャンス！　今回の状況を上手く利用すれば、小猫ちゃんを落とせるよな……。序でにこの事件の後はゼノヴィアと……たまんねぇぜ!!!）

『皆楽しみにしているから、上手くやってくれよ』と書かれた手紙を誰にも見られないように握りつぶしつつ、一誠は上機嫌に部屋にダンボールを運んで行ったそうな。

内心で『ヒャッホー』と叫んでいる一誠だが、人間界と冥界で五人の女性が本気で身の危険を感じて震えて居たそうな。本気で一誠の家に泊まっていたら色々な意味で危なかったかもしれない……イリナとゼノヴィア。

ep. 010

……聖剣、或いは魔剣と呼ばれる剣が世界中には数は少ないが存在している。
だが、日ノ本に存在する剣には聖剣と呼ばれる剣も、魔剣と呼ばれる剣も存在して居ない。
唯一つ存在しているのは『神剣』と呼ばれる剣のみだ。

ある少女の話をしよう。
日本に存在する退魔の名家に生まれた彼女は剣才に恵まれ、一族に伝わる神剣の後継

者に幼くして選ばれていた。
厳しくも優しい父と見守ってくれる母、自分を慕う弟と家族に恵まれて幸せに過ごしていた。
その少女の剣才は正に剣に愛されていると言っても過言ではない。
だが、ある日彼女は全てを失った。
神剣の存在に目を付けた天界の一部の勢力が本来日本神話に属すべきその剣を狙ったのだ。
『世界を創ったのは我等の神だ。ならば異教徒の聖剣も我等が使うべきだ』
それが天界の言い分であった。天使たちによって家族を殺された少女を救ったのは、青い龍の騎士……ドラグナー。
神罰が下ると言う命乞いとも取れる呪いの言葉を吐き出す天使に対して、ドラグナーは言い放つ。『なら、その神様もお前達と同じところに送ってやる』と。
龍の騎士に救われた少女は狂気にみちた憎悪を天使とそれに組する信者たちへと、龍の騎士を慕う少女達へは仲間としての絆を、そして龍の騎士へと忠誠と情愛の入り混じった狂気に誓い愛情を抱くようになった。なお、ハーレムはオッケーらしい。

壁に叩き付けられるイリナと地に倒れるゼノヴィア……。教会から派遣された二人は運悪く彼女に見つかってしまった。

……狂気に染まった憎悪を抱いた彼女にとって、天界側に属する教会に所属する二人を殺すことに躊躇など無く、聖剣に至っても主への土産に丁度いいと思っている。命を奪う事への躊躇や禁忌など感じさせず、寧ろ聖剣二本を持っていけば四季に褒めて貰えるかもと言う想像で恍惚の笑みを浮かべながら、己に受け継がれた神剣を構える。

そもそも、悪魔側の勢力に捕われた彼女の友人でもある刀奈の妹達を助けるための武器として聖剣は有効だ。鋳潰して銃弾にしても良し、機械的に因子を発生させて強制的に力を使っても良し。最悪その機械と聖剣を暴走させて自爆兵器にしても良し……ぶろーくんふぁんたずむと言う扱い方も出来る。

限られた者しか使えないとしても、対悪魔兵器として聖剣を考えているのだから、そ

の辺は己の主である四季と、新しく仲間になったベルトさんが如何にかしてくれるだろうと考えている。

　自分の友人や主のいる場所をうろついている目障りな天界の側の人間を始末した上で、対悪魔用の武器も手に入る……そして、四季には褒めて貰える。彼女にとってはいい事尽くめである。

「くっ、お前はコカビエルの仲間か!?」

　ゼノヴィアの持つ破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）には目の前の少女の持つ神剣の力に負けて罅が入っている。このまま何回か打ち合って先に砕け散るのは、己の聖剣の方だと言うのは明白だろう。

　そんな、情報には無かった強敵にコカビエルとの関与を疑ってしまうが、

「コカビエル？　何故私が鴉如きの下に着かないといけませんの？　私の主は鴉等とは比べる事自体が愚かなほど素晴らしい方ですわ」

　ゼノヴィアの言葉に不愉快な表情を浮べるが、直ぐに四季の事を想像して恍惚の貌を浮べる。

『いや、それだとオレが極悪人に聞えるんだけど……』

そう言って近場に有る鏡面から飛び出し、契約モンスターのドラグレッダーを引き連れながらゼノヴィア達と少女の間に立つドラグナー。どう考えても先ほどの少女の言葉だと、悪の親玉に聞える。

……まあ、考え方によっては絵的に似合ってしまうかもしれないので、その辺の風潮被害は注意したいドラグナー……四季であった。

「ああ、主様ぁ」

そんなドラグナーの言葉も無視して恍惚の表情を浮べながら現れたドラグナーへと一礼する。確かに聖剣は欲しいが特に被害を被った訳でもない女の子二人を虐殺する寸前で間に合ったのは良かった……本当に。

確かに、鋳潰して銃弾に加工したり新しいハンドル剣の材料にしても良いのでドロップアイテムの聖剣二本は魅力的だが。

「取り合えず、不服だろうけど此処は剣を引いてくれ、夜架」

「畏まりました」

流石に一般の教会関係者まで手にかけたりはしないが、一定のラインを超えると問答無用で殺すと言う選択以外に存在しなくなる彼女の凶行を止めさせるのが専決だ。別に天使相手ならば良いが。最悪契約モンスターの餌にも出来るのだし。

彼女にしてみれば、レアアイテムが持ったモンスターにエンカウントした程度の認識

だろう。
　不平も不満も無くドラグナーの指示を受容れる辺りが彼女の己に対する狂信具合がよく分かる。……身内に危険が無いので全面的に放置しているが。
「ほら、これを貸してやるから先に戻っていてくれ」
「畏まりました、主様」
　そう言って投げ渡すのは、ダークウイングとの契約のカードが入ったカードデッキ。それを恍惚とした表情で抱きしめると、ドラグナーへと一礼して鏡の中に飛び込んでいく。カードデッキを渡した場合は、誰にも見つからないように行動しろと言う意味なのだが、その辺は向こうも十全に理解している様子だ。
　流石に彼女の狂信具合から考えて、この場で自分が引けと言えば素直に引くだろうと考えた結果だが……あの様子なら脇目も振らずに家まで向かってくれる事だろう。
「……た、助かったのか……？」
「そ、そうみたいね」
「取り合えず、あいつの事は本人に代わって謝っておく」
　内心で『何一つ悪いとは思ってないだろうし』と呟きながら、心の中で彼女の暴走具合について溜息を吐く。教会関係者……一応裏の関係者にこそ限定されるが、彼女の視界の中で行動していれば、問答無用に殺しに掛かるのも良く知っている。

……寧ろ、天使の場合は既に死んでいる可能性も高い。視界に入った瞬間、死を覚悟する間も無く呼吸を保するレベルで『当然』と言った感覚に殺しに掛かる。……彼女にとって天使とは、目の前で生存している事すら許せない存在なのだ。

そんな彼女の思考を考えて頭を抱えると、背中を向けて立去ろうとする。

『『グゥ～』』

と、そんな音が響いた。後ろを振り返ると貌を赤くしたイリナとゼノヴィアの二人。先ほどの腹の虫の音は二人からだったようだ。

「……食べてないのか？」

無言のままに頷く二人、本当に食事を取っていない様子だ。……流石に教会がけちだと言っても、普通に旅費と食費程度は渡すだろう。聖剣もって何かの任務中に断食の修行も無いだろう。中国の選任じゃあるまいし、信仰とやらで霞食べて戦えたら、既に悪魔も全滅させられているだろう。

「……任務中に断食の修行でもやってるのか？　それとも……重要な任務に片道分の切符しか持たせないほどけち臭いのか、教会は？」

「そんなわけは無いだろう!?　イリナが経費であんな物を買ってしまったんだ！」

そう叫ぶゼノヴィアの指差す先には立派に見える額に入った絵があった。……辛うじて人に見えるが、前衛芸術かただの落書きかの二択程度の代物だろう。

随分とエクスカリバーは安いんだな、と思っていたがどうやら違っていた様子だ。だが、

「な、なんでそんな奴に財布を預けた……」

「日本出身だからと預けてしまった過去の私を殴りたい……」

「ちょ!?　それは酷くない!?」

「「酷くないだろう」」

涙目で抗議するイリナに思わずゼノヴィアとドラグナーが声を揃えて答えてしまう。

「はぁ……奢ってやるから付いて来い……」

イリナは自業自得とは言え、巻き込まれたゼノヴィアの方が哀れになったドラグナーがベルトからカードデッキを外して変身を解く。……この状況で黙って立ち去れるほど四季は非常な人間ではなかった。流石に仮面ライダーの姿で店には入れない……そもそも、変身状態で財布は取り出せないし。どっちにしても、壱度変身を説く必要が有るのだ。

……身内が襲い掛かったお詫びでもあるのだし。